エト2rK-20

文學博士金澤庄三郎著

日本文法論 全

東京 金港堂書籍株式會社

815.Ka 373 ~~452~~ n2

帝国図書館蔵書

国立国会
25.3.31
図書館

111898

序

客夏、國語傳習所より文法講話の囑ありしとき、予は多忙の故を以てこれを辭したりしが、再三の懇望辭み難く、遂に其請を容れて講莚を開きしは、やがて秋風立ちそむる頃なりき。聽講の人々は、既に一度文法を學びたりとの由なりしかば、大槪文彥氏の廣日本文典を參考書と定めて、普通の事實は總て此書に讓り、予の主として說きたるは、語原・活用等に就きて、諸先輩と意見の異なる節々のみなりき。後幾もなく、講話の完結を待ちて、印行せんとの議ありしかば、一度は、なほよく研鑽を積みたる後にこそと思ひしかども、更に又考ふれば、此文法の中には、日韓兩國語の比較研究につきて、聊いひ置きたる節もあれば、此等の問題を世に質し、研學の資となさば、裨益する所尠か

らざるべしと、遂に諾しぬ。

されば、本書は學說の評論にのみ細しく、其他に於ては概ね粗なり、故に品詞の分類及び術語の如きも、專ら參考書と定めたる廣日本文典に據り、未だ私見を交へず、但、新術語の濫造は一種の弊風にして、研究上の不便これに過ぎたるはなし、これ予が故らに廣日本文典の用語に從へる所以なり。

本書に述べたる卑見は、多く韓語との比較より出でたるものなれども、講話の際此等に論及する暇なかりしかば、說明上不備の點尠からざるべし、讀者幸に疑を質し謬を敎ふることを吝まずんば、予も亦親切なる批評と質議とには、答ふることを辭せざるべし。

明治三十六年十一月

東京本郷西片町寓居にて

金澤庄三郎識

日本文法論

目次

文字論……一—二〇

第一節　總論……一—五

文字の歷史一、文字の種類二、繪畫文字二、象形文字二、寫音文字三、一字一語體三、一字一綴體三、一字一音體四。

第二節　神代文字……五—七

神代文字有無の論五。

第三節　眞名……八—一〇

眞名の種類八、萬葉假名一〇、假名の語原一〇。

第四節　平假名……一〇—一二

平假名の作者　二、
第五節　片假名……一二——二〇
片假名の作者　一二、片假名の種類　一三、五十音圖　一四、五十音圖の作者　一五、朝鮮の吏道　一五、吏道と萬葉假名片假名との關係　一六、濁音を表はす假名　一七、半濁音の假名　一八、假名の合字　一九、長母音を表はす假名　二〇。
聲音論……二一——六一
第一節　聲音の起原……二一——二三
聲音の起原　二一、聲音の種類　二一、音の强弱　二一、音の高低　二二、音色　二二、音色の變ずる原因　二三、音の共鳴　二三。
第二節　人類の發聲機關……二三——二七
人類發聲機關の構造　二三、氣管　二四、咽喉　二四、聲帶　二四、聲門　二四、調聲管　二五、喉腔　二五、口腔　二五、硬口蓋　二六、軟口蓋　二六、懸壅垂　二六、鼻腔　二六、共鳴室　二六。
第三節　母音……二七——三一
標準母音　二七、母音の兩極端　二八、中間母音　二八、母音發達の順序　二八、半母音　三一、重母音　三一。
第四節　子音……三二——四六
ハ行子音　三二、破裂音　三四、カ行子音　三四、清濁の別　三四、タ行子音　三五、パ行子音　三六、半濁音の名稱に就きて　三七、ハ行の古音　三八、P音考　三八、摩擦音　四一、サ行子音　四一、鼻音　四三、鼻音の種類　四三、ナ行子音　四四、マ行子音　四五、顫動音　四五、ラ行子音　四五。
第五節　拗音……四六——四八
第六節　促音……四八——五〇
第七節　聲音の變化……五二——六一

單語論……六二—二二四
第一章　總論……六二——六三
單語　六二、單語の分類　六二、活用言　六二。
第二章　名詞……六三——七一
本來の名詞　六四、轉來の名詞　六四、普通名詞　六四、固有名詞　六四、
複合名詞　六九、名詞の性　六九、名詞の數　七〇。
第三章　代名詞……七一——七六
人代名詞　七二、人代名詞の變遷　七三、指示代名詞　七四、疑問代
名詞　七五。
第四章　數詞……七六——八〇
固有の數詞　七七、數詞發達の程度　七七、數詞の構造　七九、外來
の數詞　七九、助數詞　八〇。
第五章　動詞及び形容詞……八〇—一三一
第一節　總說……八〇——八九
語根　八〇、動詞形容詞各種の活用　八〇、動詞活用一元論　八五、
アストン氏の說　八五、チャムバレン氏の說　八七。
第二節　動詞形容詞の活用に關する私見……八九——九六
動詞形容詞一元論　八九、動詞有と得との關係　九二、動詞爲と
得との關係　九三、動詞活用に關する私見の綱要　九五。
第三節　動詞の法……九七—一一〇
五十音圖を以て活用を說明せんとする弊　九七、將然法　九七、
連用法　九八、中止法　九九、名詞法　一〇一、修止法　一〇一、連體法
一〇三、已然法　一〇三、命令法　一〇四、く形の副詞法　一〇六、く形の
名詞法　一〇七、み形の名詞法　一〇八。

第四節　動詞の活用に關する各論……一一〇―一二三
四段活用一一一、四段と下二段と兩樣に活用する語一一二、下二段活用一一三、下二段活用の起原一一三、複合動詞その原活用を失ふことある場合一一五、上二段活用一一七、上二段と四段と兩樣に活く語一一七、上一段活用一一八、下一段活用一一九、加行變格一二〇、佐行變格一二〇、奈行變格一二二、良行變格一二三。
第五節　形容詞の活用……一二四―一三一
志幾活用一二四、志志幾活用一二四、形容詞活用の發達一二五、形容詞の語根一二七、副詞法一二七、中止法一二八、終止法一二八、連體法一二九、已然法一二九、くみ形の名詞法一三〇。
第六章　助動詞……一三一―一六八
所謂自他の區別一三三、自動詞一三三、有對自動一三三、無對自動一三三、他動詞一三三、複對他動一三三、單對他動一三三、使役相一三三、勢相一三四、所相一三四、有得爲等の複合によりて自他及び諸相の別を生ずる事一三五。
第一節　所相助動詞……一三八―一四一
第二節　勢相助動詞……一四一―一四三
第三節　使役相助動詞……一四三―一四六
敬相一四六。
第四節　指定助動詞……一四七―一四九
第五節　打消助動詞……一五〇―一五二
第六節　過去助動詞……一五二―一六二
時の區別一五二、動詞の活用によりて表はさるゝ時の區別一五三、現在一五四、過去一五四、未來一五六、助動詞によりて表はさるゝ時の區別一五七、半過去一五八、過去一六〇。

第七節　未來助動詞……一六二—一六四
過去未來一六三、大過去一六三。
第八節　推量助動詞……一六四—一六六
第九節　詠歎助動詞……一六六—一六七
第十節　比況助動詞……一六八
第四章　副詞……一六八—一七四
副詞の種類一六九、禁止の副詞の語原一七三。
第八章　接續詞……一七四—一七五
第九章　豆爾乎波……一七五—二〇〇
第一節　名詞の下に附く豆爾波……一七六—一八四
主格のが、の一七七、ゐ一七六、領格のが、の一七七、つ一七八、に一七八、
を一七八、へ一七九、より、から一八〇、からの語原一八一、と一八二、
まで一八三。
第二節　種々の語の下に附く豆爾波……一八四—一九七
は一八四、總主の說一八六、も一八七、ぞ一八八、なむ一八九、し一八九、
こそ一九一、だに、すら一九一、さへ一九二、のみ、ばかり一九二、や、か
一九三、や、かの區別一九四、反語のや、か一九五、伏(フシ)や一九六。
第三節　動詞の下に附く豆爾波……一九七—二〇〇
ば一九七、と、ともども一九八、に、を、が一九九、て一九九、で二〇〇、
つゝ二〇〇。
第十章　感動詞……二〇〇—二〇七
や二〇三、も二〇三、は二〇三、を二〇四、な二〇四、よ二〇五、か、かも、
かな二〇五、が、がも、がな二〇五、ね、なん二〇六、かし二〇七。
第十一章　熟語及疊語……二〇七—二一一

第一節　熟語……二〇八—二〇九
熟語名詞二〇八、熟語動詞二〇九、熟語形容詞二〇九、熟語副詞二〇九、熟語接續詞二〇九。
第二節　疊語……二一〇—二一二
名詞の疊語二一〇、動詞の疊語二一〇、形容詞の疊語二一一、副詞の疊語二一一。
第十二章　接頭語　接尾語……二一二—二二四
名詞の複數を造るもの二一四、名詞を造る接尾語二一五、み形の名詞法に就きての論二一六、動詞を造る接尾語二一七、形容詞を造る接尾語二一八、副詞を造る接尾語二一九。
文章論……二二五—二六二
第一節　總論……二二五—二二八

文章二二五、主語二二五、說明語二二六、客語二二六、修飾語二二七。
第二節　枕詞……二二八—二三一
枕詞二二八、枕詞の起原二二九、形容的枕詞二二九、言掛的枕詞二三〇。
第三節　複文……二三一—二三二
第四節　挿入文……二三二
第五節　倒置句……二三三—二三四
第六節　言掛……二三四—二三五
言掛二三四、語戯二三五。
第七節　掛結……二三六—二四七
尋常の結二三九、ぞの結二四〇、なむの結二四〇、やの結二四一、かの結二四一、こその結二四一、掛結の起原二四二、掛結の原因は語句の倒置にあり二四二、やかの結に連體法を用ふるはこれに未

來の意義あるによる二四二、ぞを連體にて結ぶはぞの語原名詞
なるによる二四六、こその掛結の變遷二四七。
第八節　呼應……二四九―二六〇
自他の呼應二四九、能所の呼應二五〇、時の呼應二五一、反語の呼
應二五三。
第九節　略語……二六〇―二六一
第十節　解剖……二六一―二六二

日本文法論

金澤庄三郎著

文字論

第一節　總說

我國字の過去現在將來を知らんとせば、文字史の一般に關する智識なかるべからず。

そも〳〵文字は、無形にして其存在極めて短かき言語を、形に表はして、これを永遠に傳ふる要具なり、故にこれが發明は人文史上最も記憶を價するものゝ一にして、若し未開の蠻民中に行はるゝ結繩・繪畫に等しき文字を數へなば、其數も亦尠からざるべしといへども、古今を通じて完備せる歴史を有し、五大洲中の大部に用ひらるゝものに至ては、いまだ五指を屈するに足らざるなり、卽ちこれを西にしては、埃及文字が象

形體より漸次發達して、遂に完全なる寫音文字となり、フィニキア・希臘・羅馬を經て全歐に傳播せると、これを東にしては、支那文字が終始一貫形象文字として其發達を遂くし、進みては日本・朝鮮に傳はりて、これを同文の國となしたると、寥々唯この二者あるのみ。

文字の種類

文字の發達を大別して、繪畫、象形、寫音の三期に分ち、又寫音の中を細別して、一字一語、一字一綴、一字一音の三とす、

繪畫文字

繪畫文字とは粗雜なる繪畫によりて、思想の全體を寫せるものなれば、思想を構成せる各部分につきてはこれを示めすことなく、また言語の聲音とは何等の關係もなき、最も不完全なる文字にして、現今これを用ふるものは、メキシコ土民等二三の蠻民に過ぎず、象形文字とは繪畫文字の稍進めるものにして、思想を分析して、其各部分を、殆

象形文字

寫音文字

んど符號に過ぎざるまでに省略したる畫體を以て表せるものをいふ、支那文字の多數はこれに屬す、寫音文字に至りて始めて文字の本領に達せり、卽ち此場合に寫す所は、思想其物にあらずして、思想を代表せる言語の聲音なり、

一字一語體

其中一字一語體は一語全體の音を一文字によりて表はすものにして、漢字の幾部分はこれに屬す、例へば挍・校・狡・咬・皎・郊・鮫・蛟の交の如きは既に象形文字にあらずして、一語全部を表はせる寫音文字なり、

一字一綴體

一字一綴體は其名の示めすが如く、一文字一綴の音を限りて寫すものなれば、一綴以上よりなれる語は隨て二個以上の文字によりて表はさる、我國假名文字は此種類の一にして、例へば、き(木)、はな(花)、からす(烏)、かさゝき(鵲)等の如く、皆其綴と同數の文

形體より漸次發達して、遂に完全なる寫音文字となり、フィニキア・希臘・羅馬を經て全歐に傳播せると、これを東にしては、支那文字が終始一貫形象文字として其發達を遲くし、進みては日本・朝鮮に傳はりて、これを同文の國となしたると、寥々唯この二者あるのみ。

文字の種類

文字の發達を大別して、繪畫、象形、寫音の三期に分ち、又寫音の中を細別して、一字一語、一字一綴、一字一音の三とす、

繪畫文字

繪畫文字とは粗雜なる繪畫によりて、思想の全體を寫せるものなれば、思想を構成せる各部分につきてはこれを示めすことなく、また言語の聲音とは何等の關係もなき、最も不完全なる文字にして、現今これを用ふるものは、メキシコ土民等二三の蠻民に過ぎず、象形文字とは繪畫文字の稍進めるものにして、思想を分析して、其各部分を、殆

寫音文字

んど符號に過ぎざるまでに省略したる畫體を以て表せるものをいふ、支那文字の多數はこれに屬す、寫音文字に至りて始めて文字の本領に達せり、卽ち此場合に寫す所は、思想其物にあらずして、思想を代表せる言語の聲音なり、

一字一語體

其中一字一語體は一語全體の音を一文字によりて表はすものにして、漢字の幾部分はこれに屬す、例へば校・校・狡・咬・皎・郊・鮫・蛟の交の如きは既に象形文字にあらずして、

一字一綴體

一語全部を表はせる寫音文字なり、一字一綴體は其名の示めすが如く、一文字一綴の音を限りて寫すものなれば、一綴以上よりなれる語は隨て二個以上の文字によりて表はさる、我國假名文字は此種類の一にして、例へば、き(木)、はな(花)、からす(烏)、かさゝぎ(鵲)等の如く、皆其綴と同數の文

字よりなれり、一字一音體は更らに一歩を進め、一綴を組織せる各音を、別箇の文字にて表はせり、歐羅巴各國に行はるゝアルファベット文字、及び朝鮮の諺文等これなり。

文字の種類かく饒多なるが中、いづれか最も進歩せるものなる、文字の目的が無形の言語を形に表はして、これに時間・空間的の存在を與ふるにある以上は、かの繪畫・形象兩文字の如く、直接に聲音を代表せざるものは最も劣等にして、アルファベットの如く、一音毎に別箇の符號を定むるものゝ最も完全なるべきは、理論上當然のことなれども、文字の發達は自から其國語の性質に伴へるものなれば、這般の消息を顧みず理論の一邊に偏するは危險なり、かの支那文字を見よ、其多數は象形體にして、文字史上の位置より見れば頗る劣等なれども、今日吾人の目擊するが如く、其發達旺盛を極め、實に東洋文字の覇權を握れり、かくの如き國語に對しては、理論上如何に優等の羅馬字なればとて、これを適用する可否得失は、決して一朝一夕に定むべからざるなり、予は既に世界文字の類別を略敍し、これより我國字の由來・現狀を說き、其文字界に於ける位置を論ぜんとするに當り、特に此點に關して讀者の注意を促がさんとす。

我國の假名文字は、遍く人の知る如く、漢字に起源せるものにして、其以前我國固有に發達せる文字、卽ち所謂神代文字と稱するものゝ存在に付きては、諸家の說一樣ならず、今少しくこれを辯ぜんとす。

第二節　神代文字

神代文字ありとする論者は、日本紀(天武帝十一年三月命境部連、石積等更肇俾造新字一部四十四卷)、神代口訣(神代

文字象形也應神天皇御宇異域書始來朝至推古天皇朝聖德太子以漢字附日本字後百有餘年而成此書焉)等を證とし、平田篤胤を首とし神道家多くはこれを唱へ、神代文字なしとするは伴信友等の一派にして、古語拾遺(蓋聞上古之世未有文字貴賤老少口々相傳)、新撰姓氏錄(蓋聞天孫降襲西北之時神世伊開書記靡傳)、本朝文粹(上古之事出口傳)等に據りてこれを主張す、兩派互に論難して相讓らずといへども、遂に聞くべきは上古無文字の說なり、今其主要なる理由を擧ぐれば

(一)所謂神代文字の多數は、一字一音のアルファベット體に屬す、繪畫象形の時代を踏まずして、直ちに高等なる寫音文字を、殊に上古の世に於て、發明し得べしとは、世界全體の文字史上より到底信じ得べからざる事、

(二)若し上古に文字ありとすれば、何故に文(フミ)(文の音)紙(カミ)(簡の音)筆(フデ)(筆の音)等文字に關係ある語を漢字より取りしか、

(三)所謂神代文字の多數は朝鮮の諺文と一致して、後世彼地より輸入せられたるかの疑あること。

等にして、結極神代有文字の論は、皇國固有の文字なきを恥辱なりとする、一種の見解より出でたるものゝ如く、議論としては甚だ薄弱なり、要するに上古の世には文字なく、假令また一種の文字ありたりとすとも、そは少數の社會に限られ、廣く行はれずして止みたるべく、今日傳へて神代文字なりとするものは、朝鮮其他の外國文字なるか、或は後世の僞作なりと見る方當を得たるが如し。

眞名の種類

第三節　眞名

我國人が文字を知りたるは、漢字を以て始とす、卽ち漢學傳來後、其隆盛に伴ひて漸くこれに親しみ、遂に漢字を以て我國語を寫さんことを企つるに至れり、而して其始は漢字の音訓を綴合して、國語の聲音を表はすを以て眼目となしたれば、一字必しも一綴を限れるにあらず、其種類も亦隨て多樣なりき、例へば

(一)一字音によりて一音を表はせるもの、例へば阿(a)伊(i)宇(u)の類。
(二)字音の一部によりて一音を表はせるもの、例へば安(an)印(in)雲(un)の類。
(三)一字音によりて一綴音を表はせるもの、例へば歌(ka)妓(ki)久(ku)の類。
(四)字音の一部によりて一綴音を表はせるもの、例へば作(sak)丹(tan)南(nam)の類。
(五)一字音によりて二綴音を表はせるもの、例へば郡(kum)を國(kuni)に用ひ、難(nan)を何(nani)に用ひたるが如し。
(六)一字の訓によりて一音を表はせるもの、例へば余(a)江(e)の類。
(七)字訓の一部によりて一音を表はせるもの、例へば足(asi)の類。
(八)一字の訓によりて一綴を表はせるもの、田(ta)魚(na)の類。
(九)字訓の一部によりて一綴を表はせるもの、猿(sarum)鳥(toru)の類。
(一〇)一字の訓によりて二綴音以上を表はせるもの、例へば綿(wata)を海の意に用ひ、慍(ikari)を碇の義に用ひたるが如し。

これ等の外なほ、冬風(嵐)、戀水(涙)、西渡(傾)、重石(碇)等の如く、語句の意義より轉ぜるもあり、馬聲・蜂音・牛鳴・喚鷄の如く、自然の聲に象れるもあり、或は羲之をテシ(王羲之は能書の譽れ高き人なれば手師と訓ぜるなり)の音に用ふるが如

き、簡接に其義訓を借れるもあり。

萬葉假名

かくの如く、漢字の音訓を假りて國語を表はせる、文字の一體を稱して假名といふ、萬葉集は卽ちこの字體にて記されたるものなるにより、これを萬葉假名ともいひ、又次の平假名・片假名に對しては眞名ともいふ。

假名の語原

假名（カリナ）といふは假名（カリナ）の約にして、漢字の音訓を假りて國語の音を寫せるよりの名なるべし、これを神名（カンナ）の轉とするは多く神道家の說く所にして、取るに足らず、近來この語原を梵語 Karana (文字)に求めんとする論あり、亦一說とすべし。

平假名

第四節　平假名

眞名の使用漸く廣まるに及びて、多劃なる漢字を記るす煩を厭ひ、其字體の最も簡單なる草體を用ひしが、尙一層これを節略して、遂に一種の字體をなすに至れり、これを平假名といふ。

平假名の作者

されば、平假名は漸次發達せるものにして、一人の手になれるにあらず、世にこれを空海の作なりと傳ふれども、確證なし、もとより空海は聞ゆる能書の師なれば、當時通用せる各種の字體中より最も運筆の便よきものを選びたるべく、またこれを今樣體の和讃に讀み込めて『色は匂へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、有爲の奧山、今日越えて、淺き夢見じ醉ひもせず』としたりといふも事實なるべし。

左に載するは、平假名の以呂波歌なり、一字に異體あるものは、細書して添へたり。

いろは　にほへと
ろ　はそ　ほ　へ
ちり　ぬる　を
ぬ　な　ほ
わか　よた　れそ
つね　ならむ
うゐの　おくやま
け　ふこえて
あさき　ゆめみし
ゑひもせす

ち り ぬ る を わ か よ た れ そ つ ね な ら む う ゐ の お く や ま け ふ こ え て あ さ き ゆ め み し ゑ ひ も せ す

第五節　片假名

片假名其作者

平假名と相並びて片假名あり、世にこれが作者を吉備眞備なりと傳ふれども、確ならず、これも亦平假名と同じく、一人若しくは一時代の作にあらずして、漢字渡來後これを假りて國語を寫すに、字劃多くして便惡しければ、何時となく其偏旁點劃を省く風行はれ、遂に一種の字體となれるなるべし、但し字畫を省略することは、既に漢土に於て行はれ、韵を匂、掃を帚とする類多く、我國に於ても村を寸に作り、他を也に作る類、遠く古事記・書紀等に見えたれば、此等より發達して遂に片假名に至れるならん。

片假名の種類

片假名とは、漢字の一片を取れるより起れる名にして、其音訓を利用せる樣、眞名と同じけれど、此場合に寫す所は一音、若しくは一綴音に限れり。

(一)一字音によりて一音を表はせるもの、例ばイ(伊の扁)、ウ(宇の冠)の如し。

(二)一字音によりて一綴音を表はせるもの、例へばカ(加の扁)、タ(多の上半)の如し。

(三)字音の一部によりて一綴音を表はせるもの、例へばサ(散の上片)、テ(天の上半)の如し。

(四)一字の訓によりて一音を表はせるもの、例へばエ(江の旁)の如し。

(五)一字の訓によりて一綴音を表はせるもの、例へばチ(千の全體、メ(女の下半)の如し。

(六)字訓の一部によりて一綴音を表はせるもの、例へばト(止の上半)の如し。

五十音圖

左に片假名五十音圖を擧げん

阿行　ア　イ　ウ　エ　オ

加行　カ　キ　ク　ケ　コ

佐行　サ　シ　ス　セ　ソ

多行　タ　チ　ツ　テ　ト

奈行　ナ　ニ　ヌ　ネ　ノ

波行　ハ　ヒ　フ　ヘ　ホ

末行　マ　ミ　ム　メ　モ

也行　ヤ　イ　ユ　エ　ヨ

良行　ラ　リ　ル　レ　ロ

和行　ワ　ヰ　ウ　ヱ　ヲ

五十音圖の作者

この五十音圖の配列は、學理上の聲音分類法に協へるものにして、印度デヴナガリと其順序甚相似たり、一說に古く我國に來りし婆羅門僧徒の、印度悉曇章に據りて作れるなりといふは、信なるが如し。

朝鮮の吏道

片假名の由來は概略かくの如しといへども、此に一己の私見として附記すべきことあり、そはかの漢字を我に輸入したる韓國に於て、略我國と同一の徑路を取りて發達したる、吏道といへる文字の事にして、其樣頗る我萬葉假名に類し、例へば

吏道	發音	
是良置	i-ra-tu	是の訓と、良の音と、置の訓。
爲去乙	hă-kĕ-neul	爲の訓と、去と乙との音。
爲白乎事	hă-sărp-on-il	爲と白と事との訓と、乎の音。
是白臥乎所	i-sărp-nu-on-pa	是と白と臥と所との訓と、乎の音。

の如く漢字の音訓を假りて、韓音を寫すことさへあるに、吏道の略體は、亦頗る我片假名に似たり、今其最も著しきものを擧ぐれば

吏道	吏道略體	片假名	吏道發音
伊	イ	イ	i
乎	ヲ	ヲ	ho
於	冬	オ	o
也	ㄱ	ヤ	ya
奴	又	ヌ	no

濁音を表はす假名

多	タ	ta

かくの如きは、果して偶然の暗合か、或は我片假名の彼れに倣へるか、若しくは彼の吏道が我假名に據れるか、いまだ何れとも判じ難けれど、當時先進の國としては、寧ろ彼韓國に於て、假名體の文字發芽せりと見る方、可なるが如し。

古代の我國語は、其聲音の組織比較的單簡にして、五十音を以て略これを網羅し得たりといへども、時と共に聲音漸く錯雜し來りしかば、多少の變更をこれに加へざるを得ざるに至れり。

先づ第一に、濁音を標記するが爲め、清音の肩に二點を加へたり。

ガギグゲゴ　ザジズゼゾ

半濁音の假名

ダヂヅデド　バビブベボ

此二點は(二を縦書したるものか)同一文字二箇を記すに代へたるものにして、濁音を以て二箇の清音に等しと見做せるものと覺ゆ、但し濁音は、上古より既に我國語中に存在せしものにして、萬葉集の如きは、明かに文字により て清濁を分てり、例へば

加支久氣古　賀義具雅吳
左思寸世曾　邪自受是序

の如し、されど後世に比すれば、いまだ充分なる區別なかりしものと見ゆ。

次に區別せられたるは、所謂半濁音にして、こは清音の肩に○點を附して、これを分てり。

假名の合字

パ　ピ　プ　ペ　ポ

又綴尾のn音を分つために、片假名に於てはン、平假名に於てはん文字を作れり。

此他二文字を合せて新に一體の文字となせるものあり。

こと　ゟ(より)
コト　キ(トキ)　モ(トモ)

又一字若くは二字以上の同一假名を重ねて記するとき、下の假名に代ふるに、〻又は〳〵を以てすることあり。

ちゝ(父)　はゝ(母)　はるゞ(遙)　ひとゞ(人々)
おもひ〳〵(思々)

〳〵はゝを續けたるものにして、例へばはるはるを、同字を重ねて、はゝるゝと記し、更にその二點を續けてはる

長母音を表はす假名

〳〵とし、遂に〳〵の符號を生ずるに至れるなりといふ。

又長母音を示めすにー符を用ふることあり。

バター(牛酪)　ローマ(羅馬)

明治三十三年、文部省の新定せる字音假名遣には、凡てー符を以て長母音を表はせり。

聲音の起源

聲音の種類

音の強弱

聲音論

第一節　聲音の起源

聲音の感覺は、彈力性物質の振動空氣に傳はり、波動をなして吾人の聽覺に達するによりて起る。

凡ての聲音を樂音と騷音との二種に大別す、樂音は規則正しき波動によりて起り、騷音は其形不規則なる波動によりて起る、琴笛等の音は前者に屬し、雷鳴風聲等は後者に屬す。

あらゆる聲音を(一)其強弱、(二)其高低、(三)其音色によりて區別す。

第一、音の強弱は常に音波の高低と比例し、音波高ければ

音の高低

音色

これより起る聲音隨て強し。

第二、音の高低は、音波の速力、卽ち一定の時刻間に振動する音波の數に比例す、吾人の聽覺に觸るゝ最低音は、一秒時に三十波動をなし、其最高音は一秒時中に四千波動をなすといふ、而してこの範圍以外に屬するものは、吾人の感覺を以て分辨し得ざるなり。

第三、音色は音波の形によりて變ず、強弱高低の同一なる二音も、振動の本體異れば音色亦隨て同じからず、而して音波の形の變ずるは、一に其音波に伴ひて起る附屬波動の種類、及其多少に基因す、此副音波より起る附屬音の存在は、容易に覺知し難しといへども、恰かも太陽の光線が七色より組成せるが如く、如何なる聲音も多少の附屬音

音色の變ずる原因

音の共鳴

人類發聲機關の構造

を有せざるはなし。

今Aなる音波中にBなる物質を投ずるとき、若しB物質の主音波、A波動の副音波abcd……中の何れかに符合するか、或は類似する時は、B物質はA音波に感じて、自然に共鳴し、茲に一副音波を增加して、結極A音波の音色を變動するに至る、而して其物質に彈力性多ければ、音波の波動を感ずること愈甚し、此點に於ても亦、最彈力性ある空氣は、諸種の有用なる作用をなすこと、次に論ずるが如し。

第二節　人類の發聲機關

人類の發聲機關は三箇の要部よりなる、(一)氣管、(二)咽喉、(三)

氣管　咽喉　聲帶　聲門

調聲管これなり。

第一、氣管は彈力質の管にして、下は左右兩肺に達して、無數の枝を咲かし、其上部は咽喉に續く、卽ち肺臟より出づる空氣の通路なり。

第二、咽喉とは氣管の上部に位する一室にして、五箇の軟骨よりなる、其最上に位するものを、會厭軟骨といひ、咽喉腔の開閉を司どる、卽ち食物嚥下の際には咽喉の路を蔽ひて、食道と相混ずることなからしむ、此咽喉腔の中央より少しく上方に位して、二條の彈力質靱帶あり、これを聲帶といひ其中間の空虛を聲門といふ。

聲帶は、咽喉を組織する諸種の軟骨の巧妙なる運動によりて、自由に縮張す、今其緊張せられて、聲門の間隙狹少なる時、肺臟より空氣の排出せらるゝに遇へば、彈力性の聲帶は玆に振動を起して、聲音の根元を作る。

聲帶の長短は、老幼男女によりて同じからず、其緊張せられたる時の長さは、男子に於て平均二十三、六分の一ミリメートル、女子に於ては平均十五、三分の二ミリメートルなり、卽ち男女間に約三分の一の差あり、而して此長短は、波動の速力と反比例をなすものなるが故に、聲帶短かければ、これより起る音波の速力多く、隨て其音調高しこれ男女兩性間の音聲に高低の差ある所以なり。

調聲管　喉腔　口腔

第三、調聲管とは、咽喉より上方に位する腔間を總稱する名目にして、喉腔、鼻腔、口腔の三要部よりなる、(一)喉腔は會厭軟骨より上方、口腔、鼻腔に至る間をいひ、(二)口腔は喉腔の上前方に位し、上下兩顎骨と唇とによりて包まれ、其內に舌、齒あり、其中上顎のみは固着すれども下顎は上顎と

硬口蓋
軟口蓋
懸壅垂
鼻腔
共鳴室

某角度を造りて開閉し、下齒及舌・唇も之に伴ひて運動す、舌と唇とは又諸種の筋肉の伸縮によりて、獨立に自在なる運動をなし、かくて口腔の大さを樣々に變ず、上顎は硬口蓋と軟口蓋とよりなり、軟口蓋の終る處は肉の小片餘りて垂れたり、これを懸壅垂といひ、これ亦前後に動きて、鼻腔と喉腔との通路を開閉す、(三)鼻腔は喉腔より上方兩鼻に通ずる腔間にして、懸壅垂によりて喉腔と斷續する事の外、其開閉伸縮を宰どる機關なし。

調聲管とは此三腔の總稱にして、此内に籠れる空氣は、聲帶の振動によりて起れる音波に感じて共鳴し、副音波を增減して諸種の音色を生ず、而して舌・唇・懸壅垂等の運動によりて、調聲管の形は殆んど無窮に變ずるが故に、これが共鳴室となりて生ずる音色も亦千變萬化す。

母音
標準母音

第三節　母音

聲帶の振動によりて起る音波、調聲管を通過する際、其共鳴によりて副音波を增減し、樣々の音色を生ず、此音色こそ卽ち所謂母音にして、口腔の形變化窮なきを以て、母音の種類も亦殆んど限りなし。

然れども、かく無限の母音を、盡く標記せん事、到底よく爲し得べき所にあらざれば、其中より特に數者を拔き出して、他を代表せしむるを常とす、歐洲諸國語に於て此標準母音の數凡十八あれども、我國の文章語には於ては、從來これをアイウエオの五音に限りたり。

ウ(u)音を發するには、舌の後部を高めて軟口蓋に近づけ、

母音中の兩極端

中間母音

兩唇の間を圓形に形造り、イ(i)音を發するには、舌の前部を硬口蓋に近け、兩唇の間を偏平に形造る、故に其構造正反對にして、ウイは母音の兩極端を表はせる聲音なり。他のオ(o)、ア(a)、エ(e)三音は、ウイの間に位する中間音にして、卽ち、ウ音の位置より、漸次舌を低くめ、唇を開きてオ(o)音に至り、更に舌を降して、殆んど平常の位置に復せしめ、唇をも尙開けば、ア(a)音を發すべし、ア音より舌を少しく前方に進めて硬口蓋に向はしめ、唇を少しく狹むれば、エ(e)音を生じ、舌を尙上顎に近け、唇を愈狹めて偏平ならしむれば、遂にイ(i)音に達すべし、故に、ウよりイに向ひて、母音を數ふれば、ウ、オ、ア、エ、イの順序となる。

母音發達の順序

かくの如く、オはアとウ、エはアとイとの中間に位する音なるが故に、アウ相並べはオとなり、アイ相並べはエとなることあり、例へば

たうげ(峠) ta-u-ge = tôge

かうべ(頭) ka-u-be = kôbe

ながいき(長息) na-ga-i-ki = nageki

きあり(來有) ki-a-ri = keri

の如し、されば國語に於ける母音の系統を論ずれば、先づ兩極端のウ・イ兩音と、其中間のア音とありて、オ・エは其發達これに次げるもの丶如し、次に擧ぐる例の如く、古音ウにして後オに轉ぜるもの多きも其一證なり。

ヌ(野)	nu	ノ	no
ツヌ(角)	tsu-nu	ツノ	tsu-no
スダチ(巢立)	su-da-chi	ソダチ	so-da-chi
シヌブ(忍)	si-nu-bu	シノブ	si-no-bu
タヌシ(樂)	ta-nu-si	タノシ	ta-no-si

尤も、マヨ(眉)をマユといふ類もなきにあらねど、前者に比すれば、其例甚だ少し、これを日韓兩國の漢字音に徵するに、亦同樣の結果を得べし。

	字音	韓音
國	koku	kuk
母	mo	mu
門	mon	mun
盆	bon	pun
杜	to	tu

かくの如し、韓音uより。oに轉じたる例は、頗る多けれど、其反對の場合極めて少數なるを思へば、uよりoに向へる母音の傾向を窺ふに足るべし。

凡そ一綴の中には聲の最も秀でたる所ありて他は恰もこれに隨伴して響くものゝ如し、故に今暫しこれを主音

半母音
重母音

從音と稱す、例へばanlaの主音はaにして、從音はnlなり、かく大抵主音たるは母音にして從音は子音なるを、今若し二母音合併して、恰かも一音の如く唱へらるゝ場合に、其内の一は比較上主音となり、他の一は從音となる、この從音たる母音を稱して半母音といふ。

i-a	i-i	i-u	i-e	i-o	
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	
u-a	u-i	u-u	u-e	u-o	
ワ	ヰ	ウ	ヱ	ヲ	

符あるは半母音なり

第四節　子音

普通の呼吸をなす時に當りては、聲帶弛みて聲門の間隙廣し、今聲帶を少しく張り、聲門を稍狹めて、深厚なる氣息を吐出するときはh音を生ず、これ卽ち波行音の子音なり。

波行子音

ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ha	hi	hu	he	ho

若し此時、なほ舌の後部を懸壅垂に近けて通路を狹むれば、喉音を生ず、此音は我國語に無けれども韓國語にあり。

	韓音	國音
賀	ha	gu
鶴	hak	kaku
韓	han	kan

豪	ho	gau
勳	hun	kun

かくの如く、韓音hの國語にてkとなれるは、もとその喉音なるによる。

故に、h音は聲帶の振動によりて起る樂音にあらずして、聲門・喉頭等の通路稍狹まりたるに、比較的深厚なる空氣これを通過せんとするより生ずる、一種の騷音なり。

此種の深厚なる空氣、調聲管を通過して口外に出づるまでの途中の處々に於て、其通路一時全く閉塞して後、俄に開くにより、又其通路非常に逼まりて、漸く一條の空隙を殘せるが爲めに、各種の聲音を生ず、此第一種を破裂音といひ、第二種を摩擦音といふ。

一、破裂音

破裂音

破裂音とは、一時氣流を遮りて其充分漲れる時、俄にこれを放つによりて起る音をいふ、今、舌の後部を軟口蓋に觸れて、破裂音を起せば、k音を生ず、卽ち加行音

カ　キ　ク　ケ　コ

ka　ki　ku　ke　ko

カ行子音

の子音なり、これを喉的破裂音といふ、既に前にも述べたるが如く、かくして造られたる子音は、たゞ濃厚なる氣流聲帶を通ぜるのみにして、いまだこれを振動せしむるに至らざれど、今若し調聲管其他の位置は、凡てkの時と同じくし、同時に少しく聲帶を狹めて、多少これを振動せしむるときは、其結果所謂濁音gを生ず、卽ちガ行音

ガ　ギ　グ　ゲ　ゴ

清濁の別

ga　gi　gu　ge　go

ガ行子音

の子音なり、故に清音と濁音との差は、一に聲帶の振動すると、せざるとにあり、以下各種の清濁音皆これに準ず。

次に、舌端を上齒の背面に觸れて、破裂音を起せば、t音を生ず、卽ち多行音

タ　チ　ツ　テ　ト

ta　ti (chi)　tu (tsu)　te　to

タ行子音

の子音なり、これを齒的破裂音といふ、この内チとツとは chi tsu と變じたれど、古音は ti tu なりしが如く、古事記に鴨着島を加毛度久斯麻と書し、書紀に泉河を挑河の訛とせり、鼓の名は其音より起りたるべければ、tutuni の方然るべく、萬葉に喚鶏をツヽと讀ませたるなども、寧ろ tu tu

の音なるべし。

tの濁音はdにして卽ちダ行音

da	di (dji)	du (dsu)	de	do
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド

の子音にして、其構造は前條に述べたるが如く、聲帶の振動伴ふによりて起る、ヂ‖ヅの古音di duなりし事も、亦ナ‖ニに準じて知るべし。

次に、上下兩唇を觸れて、破裂音を起さしむる時は、p音を生ず、卽ちパ行音

pa	pi	pu	pe	po
パ	ピ	プ	ペ	ポ

の子音なり、これを唇的破裂音といふ、世にこれをハ行の

半濁音なりと稱し、文字も亦ハ行に。を附して區別すれども非なり、パ行音pとハ行音hとは何等の關係もなく、パ行音pは一種の獨立音にして、從來ハ行の濁音と認められたるバ行音は、反て此パ行音の濁音なり、卽ち兩唇を閉ぢて破裂音を起すと同時に、多少聲帶を振動せしむるときは、玆にb音を生ず。

ba	bi	bu	be	bo
バ	ビ	ブ	ベ	ボ

故に、半濁音と稱せられたるパ行子音pは、其實清音にして、其濁音は卽ちバ行子音bなり、然らばハ行音とバ行音との關係は如何といふに、今日のハ行子音hと、バ行子音b、パ行子音pとは、既に前條に述べたるが如く、其間何等の關係もなけれど、玆に一の問題あり、曰く、ハ行子

音は、古より今日の如くh音なりしか、或は別に一種の古音を備へたりしか。

此問題は嘗て學者の間に論議せられたれども、いまだ一定せざるに似たり、予はハ行の古音を、唇音pなりとする論者の一人なれども、此にこれを詳論するは、甚だ枝葉に渉る恐あれば、唯二三の例證を擧げて止まむ。

(一)清音と濁音との關係、上記の如くなればハ行音hの濁りて、バ行音bとなるべき所由なし。

(二)古來我國の音韵學者が、波行音を唇音としたる事。

(三)各地の方言中に、ハ行を唇音fに近く發音するものある事、和訓栞曰く、出雲人ははひふへほの音甚重く、ふわふゐふうふゑふをと聞ゆ、平家をふゑいけ、半分をふわんぶんといふ類也。

ホフマン氏、其日本文典中に、また此事を論じて、十七世紀の末葉より十八世紀の初半までに、我國に渡來せる蘭人の著作を見るに、波行音は皆唇音fを以て表はしたりといへり、例へば播磨を farima とし、平戸を firado とするが如し。

(四)波行音を表す爲めに、借り用ひたる漢字の原音、いづれも唇音なる事、例へば八非不逼保等皆然り。

(五)かは(川)、かほ(顔)、をは(鹿)、いは(岩)等の如く波行音の轉じて、和行唇音wとなれるものある事。

(六)波行音にて始まれる漢字音は、韓國に於てなほ盡く唇音pなる事。

例へば

漢字	韓音	字音	
博	pak	はく	haku
肥	pi	ひ	hi
彬	pin	ひん	hin
寶	po	はう	hau
本	pon	ほん	hon

(七)日韓兩國語同根の語を對比するに、我波行音は彼に於て盡くp音となれること、例へば

韓語	日本語
口	云
價	買
田	畑
鳩	鳩

(八)ハヒフヘホの中フ音のみは、今日といへども、純粹に唇音として發音せらるゝ事。

(九)所謂連濁の場合に、波行はp音となる事、例へば立(リツ)と派(ハ)と合して立(リツ)派(パ)となり、思(オモヒ)と計(ハカル)と連りて思計(オモヒパカル)(慮)となる類。

此等の事實を合せ考ふるに、波行の古音唇音なりし事疑を容るべからず、唯唇音の如何なる種類なりしか、そは尚研究を要すべき問題なれど、思ふに最古の音はpにして、次にf wの時代あり、最後今日のh音に變

じたりと觀る方最も適當なるが如し。

二、摩擦音

摩擦音とは、調聲管の一部非常に狹まり、此處を通過する空氣の摩擦して起る騷音をいふ、今舌を上方に高めて、軟口蓋と硬口蓋との境する邊りに接して、氣息を通過せしむれば、茲に一種の摩擦音を起す、例へば獨逸語ich に於けるchの如し、これを喉的摩擦音といふ、此音は我國語に存在せざれども、これを有聲(卽ち聲帶を振動せしむ)ならしむれば、かの重母音ヤ行の子音に類する音yを生ず。次に、舌端を硬口蓋の前部に接して摩擦音を起せば、サ行の子音s音を生ず、これを顎的摩擦音といふ。

サ　シ　ス　セ　ソ

但し、シの場合のみは、舌面少しく硬口蓋の中部に接するが爲めに、sh音を生ず、今若し調聲管の位置を上記の儘とし、聲帶に振動を與ふるときは、此摩擦音をして有聲ならしむべし、卽ち濁音ザ行の子音なり。

sa	si (shi)	su	se	so
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
za	zi	zu	ze	zo

次に、上齒と下唇とを相接觸して、摩擦音を發すれば、ヱ音を生ず、これを唇齒摩擦音といふ、今日の國語に於ては、方言を除くの外、フ音の子音稍これに近きのみにして、他に此音を見ず。

次に上下兩唇を接して、有聲の摩擦音卽ち、聲帶の振動を受けたる空氣を通過せしむるときは、重母音和行の子音に近き、w音を生ず。

三、鼻音

鼻音

上記の諸音を發するに當りて、懸壅垂は常に喉腔の後壁に密接して、鼻腔との交通を全く遮れり、今此懸壅垂を前方に垂れ、鼻腔の通路を開きて、調聲管を破裂音k t pの位置に保ち、有聲の氣息を通ずれば、三種の鼻音ng n mを生ず。

鼻音の種類

第一ngは喉的鼻音にして、これを發するには、k音を發する場合の如く、舌の後部を軟口蓋に觸れしめ、懸壅垂を前方に垂れて、鼻腔の通路を開き、これに有聲の氣息を通過せしむべし、我五十音圖には、此音を標記する假字なし、さ

れば我國の古代にはなかりし音なるか、又思ふに相模・愛宕の如く、相(sang)、宕(tang)等のng音を假りて表はせる地名あれば、當時既に此音の存在せしものか。

第二nは齒的鼻音にして、t音の場合の如く、舌端を上齒の背面に觸れしめ、懸壅垂を前方に垂れて、鼻腔の通路を開き、有聲の氣息を通じて發音す、ナ行の子音これなり。

ナ行子音

ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	
na	ni	nu	ne	no	

我國語に於て次第に、綴尾のn音を標記する必要を生じ、新に〻、んの二字を作れり、新年・因緣の如し。

第三mは唇的鼻音にして、唇はp音の場合の如く閉じ、懸壅垂を前方に垂れて、有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ず、

マ行の子音即ちこれなり。

マ行子音

マ	ミ	ム	メ	モ	
ma	mi	mu	me	mo	

四、顫動音

顫動音

ラ行の子音は摩擦音の一種なれども、これを發する時の氣息は頗る強くして、調聲管中の軟かき部分は、皆多少顫動するが故に、これを顫動音と稱して區別す。

ラ行子音

ラ	リ	ル	レ	ロ	
ra	ri	ru	re	ro	

此音を發するには、舌の位置をtnの場合と同じく、硬口蓋の前端、上齒の背部に置き、強き有聲の氣息を通じて、摩擦音を起さしむべし。

ラ行音は、我國語に於ては、外來語の外、語頭に立つことなし。

第五節　拗音

重母音ヤ行ヲ行の音他の子音の後に續き、合體して發音せらるゝことあり、これを拗音と稱し、左の諸種あり、

きゃ	kya	きゅ	kyu	きょ	kyo	ぎゃ	gya	ぎゅ	gyu	ぎょ	gyo
しゃ	sya	しゅ	syu	しょ	syo	じゃ	zya	じゅ	zyu	じょ	zyo
ちゃ	chya	ちゅ	chyu	ちょ	chyo	ぢゃ	dsya	ぢゅ	dsyu	ぢょ	dsyo
にゃ	nya	にゅ	nyu	にょ	nyo	ひゃ	hya	ひゅ	hyu	ひょ	hyo
びゃ	bya	びゅ	byu	びょ	byo	ぴゃ	pya	ぴゅ	pyu	ぴょ	pyo

gwa ぐわ | kwa くわ | rya りや | mya みや | pya

ryu りゆ | myu みゆ | pyu

ryo りよ | myo みよ | pyo

第六節　促音

立派・日課・一統・出世等のッの如く、聲の促るを稱して、促音

といふ、然れども、促音といへる一種の獨立したる聲音あるにあらず、母音より破裂音又は摩擦音に移らんとして、調聲管の或部分を閉ぢたるまゝ、暫く其狀態を持續するとき、母音の餘韻共鳴するを指し、假りにかく名けたるなり、例へば aua は母音 a、破裂音 p、母音 a より成れるが如きも、其實 a+ㅂ+a にあらずして、a と p との間には、一種の中間音あり、卽ち調聲管を a の位置より p に轉ずるとき、a の餘韻これに伴ひて響くをいふ、今若し a 音より p 音に移らんとして、調聲管を其位置に改めたるまゝ、暫く休止するときは、此中間音一層明瞭となるべし、これを稱して促音といふなり。

故に、破裂音の種類異るに連れて、促音も亦一樣ならず、例

へばaよりktpに移らんとする際に起る促音は各別種なり、然れども、假名を以てこれを表はすには、いづれも「ッ」を書し、特に區別することなし。

漢字の入聲音は皆この促音なり、然れども、我聲音法に於て、語尾の促音を許さゞるがため、此等の入聲音には、更に母音を加へて、之を避けたり、例ば一(iti)をi-chi(i-ti)、出(siyut)をsiyu-tsu (siyu-tu)とするが如し、されどこれ等の次に他の破裂音若しくは摩擦音來るときは、これに誘はれて、其入聲音を復活するを常とす。

一生　ichi-siyau　　it-siyau

出世　siyutsu-se　　siyut-se

立身　ritsu-sin　　rit-sin

以上概要述べたる聲音の諸種類を、更らに其性質と構造との上より分類すれば、左の如し。

無聲子音表

	喉頭音	喉音	顎音	齒音	唇音
破裂音		k (カ)		t (タ)	p (パ)
摩擦音	h (ハ)		ch (チ)	s (サ)	f (フ)

有聲子音表

	喉頭音	喉音	顎音	齒音	唇音
破裂音		g (グ)		d (ダ)	b (バ)
摩擦音			j (ヂ)	z (ザ)	
顫動音				r (ラ)	
鼻音		ng (ンガ)		n (ナ)	m (マ)

第七節　聲音の變化

聲音變化の原因

聲音變遷の原因は種々あり、また時代と場所とによりて一樣ならずといへども、要するに、音調を整へ、發聲を容易ならしめむとする、自然の傾向に歸すべし、故に其變化は自から一定の法則ありて、性質相似たるものゝ間にのみ行はれ、全く無關係の聲音相交換することなし、然れども此等の事を詳論するは、聲音學の範圍に屬すれば、今はただ其中の重要なるものゝみを擧げて、左に錄すべし。

轉呼音

(一)波行(h)行より和行(w)音に轉ずる聲音變化。

我國の波行音は元來唇音より出でたるものなること、既に前節に述べたる如くにして、現にふは今も尚ほ唇音の性質を帶びたれば、同一唇音に屬する和行に轉ずるは、毫も怪むに足らず、寧ろ此和行に轉ぜるものに、多く古音の俤を存すともいふべからん。

あは(粟) aha=awa　かはら(瓦) kahara=kawara
かは(川) kaha=kawa　きはみ(極) kihami=kiwami
には(庭) niha=niwa　うつは(器) utsuha=utsuwa
いは(岩) iha=iwa　くはし(詳) kuhasi=kuwasi

(二)波行(h)音よりパ行(p)音に轉ずる聲音變化。

促音に續く波行音は常にパ行音に變ず、既に述べたるが如く、促音は恰かも破裂音の前提にして、其準備たるが如きものなれば、これに續づく波行音は忽ち其本性に立ち歸りて、破裂音パ行(p)となる。

まひら　(眞平)　ma-hira　まッぴら　mappira
もはら　(專)　mo-hara　もッぱら　moppara
あはれ　(天晴)　a-hare　あッぱれ　appare
ぜひ　(是非)　ze-hi　ぜッぴ　zeppi
ひきはる　(引張)　hiki-haru　ひッぱる　hippari

(三)麻行(m)音より奈行(n)音に轉ずる聲音變化。

奈行音は齒音にして、麻行音は唇音なり、然れども、いづれも鼻音に屬するが故に、兩者相接するときは、m音はn音に同化せられ、m音單獨の場合にも屢n音となることあり。

をみな　(女)　womina　をんな　wonna
ねもころ　(懇)　nemogoro　ねんごろ　nengoro
きみたち　(公達)　kimitachi　きんだち　kindachi

あそみ　(朝臣)　asomi　あそん　ason

(四)良行(r)音より奈行(n)音に轉る聲音變化。

良行音は顫動音にして、奈行音は鼻音なれども、いづれも齒音に屬するが故に、r音のn音に同化せられ又は他の齒音のために化せられてn音となることあり。

さかりなり　(盛)　sakari-nari　さかんなり　sakannari
くだりのごとし　(如件)　kudari-no-gotosi　くだんのごとし　kudannogotosi
あらざるなり　(不有)　arazaru-nari　あらざんなり　arazannari
のこりのゆき　(殘雪)　nokori-no-yuki　のこんのゆき　nokonno-yuki
わたりつ　(渡津)　wataari-tsu　わたんづ　watandsu
かりた　(刈田)　kari-ta　かんだ　kanda

(五)波行濁音(b)より麻行(m)音に轉ずる聲音變化。

波行濁音は有聲唇音にして、麻行音も亦有聲唇音に屬す、

故に此兩音相通ずることあり。

かば（蒲）kaba　がま gama
しばらく（暫）sibaraku　しまらく simaraku
けぶり（煙）keburi　けむり kemuri
たのしぶ（樂）tanosibu　たのしむ tanosimu
よぶ（呼）yobu　よむ(讀) yomu
うかぶ（浮）ukabu　うかむ ukamu

かく波行音より麻行音に轉じたるものゝ、更に奈行(n)音となるものあり。

うかびて（浮）ukabi-te　うかんで ukan-de
よびて（呼）yobi-te　よんで yon-de

(六)二母音相重なる時は、發音の便宜上、屢其一を省略することあり、特に同母音重複する場合に多し。

かはあひ（河合）kaha-ahi　かはひ kahai
ながあめ（長雨）naga-ame　ながめ nagame
ほしいひ（乾飯）hosi-ihi　ほしひ hosihi
かりいほ（假庵）kari-iho　かりほ kariho
まつうら（松浦）matsu-ura　まつら matsura
みちのおく（陸奥）michi-no-oku　みちのく michinoku

(七)同一綴音重なるときは、發音の便宜上、其一を省略することあり。

かははら（河原）kaha-hara　かはら kaha-ra
たびびと（旅人）tabi-bito　たびと tabi-to
かななべ（金鍋）kana-nabe　かなへ（鼎）kana-he

又綴頭に同一子音を有する、綴音の重複する場合にも、其内の一を省くことあり。

あるらし　aru-rasi　　あらし　ara-si
けるらし　keru-rasi　　けらし　ke-rasi

(八)波行子音(h)、加行子音(k)、良行子音(r)は發音の便宜上、省略せらるゝこと多し。

h音の省略せらるゝ例、

いひ　(飯)　iii　　いい　ii
えほ　(幽)　siho　　えお　sio
あきひと　(商人)　akihito　　あきうど　akiudo
はゝき　(箒)　hahaki　　はうき　hauki

kの省略せらるゝ例、

つきたち　(朔)　tsuki-tachi　　ついたち　tsui-tachi
わらぐつ　(藁靴)　wara-kutsu　　わらうづ　wara-udsu
さきはひ　(幸)　saki-hahi　　さいはひ　sai-hai

つばきいち　(椿市)　tsubaki-ichi　　つばいち　tsuba-ichi

r音の省略せらるゝ例、

くつりた　(佃)　tukuri-ta　　つくだ　tsukuda
のりたまふ　(宣)　nori-tamahu　　のたまふ　notamahu
くすりし　(藥師)　kusuri-si　　くすし　kususi
かりの　(狩野)　kari-no　　かの　kano
をろがむ　(拜)　worogamu　　をがむ　wogamu
かへるて　(楓)　kaherute　　かへで　kahede

(九)二語以上相集りて、複合詞を構成する場合に、其中の一語の母音、他語の母音を全く同化するか、若しくは自己に近かき性質の母音に變ずることあり。

あととし　(後年)　ato-tosi　　おとゝし　oto-tosi
きのは　(木葉)　ki-no-ha　　このは　ko-no-ha

あれなみ　(荒浪)　are-nami　あらなみ　ara-nami
いづこ　(何處)　idsu-ko　いづく　idsu-ku
ひのほ　(火穂)　hi-no-ho　ほのほ　ho-no-ho
あれをとこ　(荒男)　are-wotoko　あらをとこ　ara-wotoko
むれとり　(群鳥)　mure-tori　むらどり　mura-dori

(ロ)鼻音(n m)、促音の次に、母音(若しくは也行音・和行音)來るときは、その餘聲母音に及びて、これを奈行・麻行・多行音に變ずることあり、これを連聲といふ、蓋し促音若くは鼻音より、直ちに母音に移るときは、其變化急激にして、發音上甚だ不便なるによる。

うんうん　(云々)　un-un　うんぬん　un-nun
さむゐ　(三位)　sam-wi　さむみ　sam-mi
てんわう　(天皇)　ten-wau　てんなう　ten-nau
けつえき　(闕掖)　ketsu-eki　けつてき　ket-teki
ほつい　(發意)　hotsu-i　ほつち　hot-chi
いんえん　(因緣)　in-en　いんねん　in-nen

(二)二語(多くは名詞)相合して熟語となる場合に、下なる語の頭濁ることあり、これを連濁といふ。

ひとひと　(人々)　hito-hito　ひとびと　hito-bito
たにかは　(谷川)　tani-kaha　たにがは　tani-gaha
やまさくら　(山櫻)　yama-sakura　やまざくら　yama-zakura
こたか　(小鷹)　ko-taka　こだか　ko-daka

右に擧げたるは、最も重要なるもののみにして、聲音變化はこれにて盡きたりといふにあらず、然れども、前節聲音の構造を論じたる處と、相照して考へなば、音韵變遷の原則は、略ぼ知ることを得べけん。

單語論

第一章　總　論

單語

一音若くは一綴音以上よりなりて、某の意義を表はし、或は他に附屬して、これに一定の意義を添ふるものを、單語といふ。

單語の分類

單語を其表はせる意義の種類によりて分類すれば、名詞・代名詞・數詞・動詞・形容詞・助動詞・副詞・接續詞・豆爾乎波・感動詞となる、これを十品詞といふ。

活用言

單語の中、動詞・形容詞・助動詞は語尾に變化あり、故にこれを活用言と名づく。

- 名詞
- 代名詞
- 數詞
- 動詞
- 形容詞
- 助動詞
- 豆爾乎波
- 副詞
- 接續詞
- 感動詞

（動詞・形容詞・助動詞：活用言）

名詞

第二章　名詞

名詞とは、有形の物體より、無形の動作・狀態に至るまで、總

て事物の名稱を表はす語なり。

本來の名詞

名詞を本來の名詞と、轉來の名詞との二に分つ、本來の名詞とは、其語の本質、名詞として定まれるものをいひ、轉來の名詞

の名詞とは、他の品詞例へば動詞・形容詞より、轉じて名詞となれるものをいふ。

普通名詞　固有名詞

本來の名詞を、普通名詞と固有名詞との二に分つ、普通名詞とは、同一種類に屬する凡てに通じて、用ひらるゝ名稱にして、例へば、海・山・川・國・市等の如し、固有名詞とは、一種類中の或一つに限りて、特に用ひらるゝ名稱にして、例へば日本・支那・東京・北京等の如し。

固有名詞、普通名詞には外來の語多し、仁義・忠孝等漢字より來れるものは無論なれども、其外寺(朝鮮語)旦那(梵語)天主(拉丁語)一戸(地名、ヘは、アイヌ語川の義)パッチ(朝鮮語)の類甚だ多し。

轉來の名詞は、主として、左の二種類なり。

(一)動詞より來れるもの、

扇(動詞あふぐ)　氷(動詞こほる)
過(同あやまつ)　網(同あむ)
商(同あきなふ)　煙(同けむる)
塵(同ちる)　富(同とむ)
使(同つかふ)　詔(同みことのる)
霞(同かすむ)　侍(同さむらふ)
刀(同みはかす)　弓(同みとらす)

右に掲げたるは、動詞の連用言より轉じたるものなれど、

歌(動詞語根)・謠(連用言)の如く、二樣に轉來したるもあり。

又古くは、動詞の語根にくを添へて、名詞となしたるも多し。

有(ある)　問(とふ)
遊(あそぶ)　會(あふ)
忍(しぬぶ)　曰(いふ)
通(かよふ)　散(ちる)
思(おもふ)　老(おゆる)
見(みる)　居(をる)
來(くる)　祈(のむ)
隱(かくる)　戀(こふる)

此等は皆名詞として用ひられたり、例へば人不榜有雲知之潛爲鵞與高部共船上住」の如く、あらくは有る事の意に用ひられ、其他梅花知良久波何處居久乃奥香母不知」などいづれもはの等名詞を受くる豆爾波の添へるにても知るべし。

(二)形容詞より來れるもの、

深(ふかし)　速(とし)
高(たかし)　甘(あまし)
淺(あさし)　繁(しげし)
薄(うすし)　難(かたし)
輕(かろし)　赤(あかし)
安(やすし)　青(あをし)

此等は皆形容詞の語根に、みの添はりて、名詞となれるも

のなり。

夏草のあげみにおふるまろこ菅
　まろがまろねよいくよへぬらん

雨をやむ雲のうすみを行く月の
　影おぼろなる夏の夜の空

此等はいづれも名詞に續く豆爾波に「を」添はりたり、此他なほ袖之引乎難見爲而伊布可思美爲登登美能許登など用例多し、苦・悲などは、苦・悲の連用言より、轉來せるものとも見るべく、また形容詞苦・悲の語根に「み」の添はりて、名詞となれるものとも見るべし。

「み」の添はりて名詞となるは、形容詞に限れるが如くなれど、もとは動詞にも及びたるもの、如く「老見幼見友垣乃」など用ひられたる老見は、老

たるもの、義にして名詞なり、此他負見抱見「咲見慍見」などもあり。

此他、白・黒・赤等、形容詞の語根を其儘に名詞としたるもあり。

以上各種の名詞は、相重なりて熟語となることあり、これを複合名詞といふ、例へば

月夜　松風　春霞　地謠　琴歌
歸路　織物　書付　賣買

名詞の性は特別にこれを表はすことなし、男性には「を」(男)、女性には「め」(女)を語頭に添へて、兩性を區別することあれど、これも多くは獸類に限れり。

牡牛　牝牛　雄鶏　雌鶏　牡鹿　牝鹿

然れど甥(we-hi)姪(me-hi)の如く、一見しては見分け難きもあ

り、又兄(ani)姉(ane)の如く、母音の變化によりて兩性を分てるもあり、もとより此等は特別の場合に限れる事實にして、一般に及ぼし難しといへども、性の區別或程度まで發達せる事は、これによりて知るべし。

名詞の數も、亦性と同じく、特別の形としてはなけれど、同一の語を重ね用ひて、複數を表はすことはあり、例へば、

人々　國々　樣々　品々　津々
浦々　時々　折々　思々

の如し、然れども、こは名詞のみに限られず、動詞も同樣に語を重複して、例へば、神集爾集神議爾議「煙立龍」など用ひらるゝことあり。

此他なほ、たち、どち、ら、ども等を添へて、複數を表はすことあり。

我等　友達　公達　女どち、子ども

此等の接尾語は、各自多少意義の差はあれど、いづれも多數を表はせり、而して、複數の語を單數の意に用ふることも亦少からず、私共・身共・子供の如き、多くは單數の意に用ひらる、嫌嬬等・妹等なども、古くは多く一人を指していへり、かく複數が單數の意に用ひらるゝ結果、複數を表はすには、更に別箇の接尾語を重複し、身共等・子供達などいふことあり。

第三章　代名詞

代名詞は名詞の代用をなす語にして、其中、人名に代へ用

ふるを人代名詞といひ、事物・位置・方向を指し示めす意なるを指示代名詞といひ、疑問の意を示めすものを疑問代名詞といふ。

人代名詞

人代名詞を第一人稱、第二人稱、第三人稱の三に分つ。

第一人稱

第一人稱は、話手が自己の名に代へ用ふるものにして、あ・われ・わ・われ・おのれ・おのれ等をいふ。

第二人稱

第二人稱は、自己と對話する、相手方の名に代ふるものにして、な・なれ・なむち等をいふ。

第三人稱

第三人稱は、對話の相手方以外の人名に代ふるものにして、あ・あれ・か・かれ等をいふ。

あれ・われ・なれ・かれ・あれ・おのれのれは、代名詞全部に通ずる語尾なれば、元は獨立の語にして、代名詞の主體は、あ・わ・な・か・あ・おのなり、我大君・吾嬬者耶・吾君・己妻・那賀美古・汝妹・彼家等の用例を見て知るべし。

代名詞の變遷

國語に於ては、人代名詞の使用甚だ少く、多くはこれを省略せり、これ直接に自己を示し、他人を指さすは、尊敬の意を薄くせんとの心より出でたるならん、故に三人稱の如きは、特別の代名詞なく、指示代名詞より借り用ひて、其人の方角を指し示せるのみ、其他の人稱に於ても、使用すると共に漸く卑稱の意を生じ、例へば初、汝命・汝兄など、長上に向ひても用ひたる語も、後には遂に卑賤の稱號と化せるが如く、われ・おのれ等も第二人稱に用ひられては、頗る輕蔑の意を含むに至れり。

一の代名詞其品位を低め、其後を充すために用ひられたるもの、又同樣の運命に遭へば、更に其代を作らざるべからず、國語の人代名詞に、其種類甚だ多きは、一はこれがためなり、即ち第一人稱には、それがし・自分・僕・私・拙者等、第二人稱には御身・御前・お前・あなた・そなた・貴樣・御邊等尚多し。

指示代名詞

指示代名詞を、其指し示めす距離の遠近によりて、近稱、中稱、遠稱の三種に分つ。

近稱

近稱は、自己に最も近きを、指し示めすものにして、こを用ひてこれを表はす、例へばこは如何に」の如し。

中稱

中稱とは、稍距りたるを指し示めすものにして、そを用ひてこれを表はす、例へばそを見れば」の如し。

遠稱

遠稱とは、甚だ遠きを指し示めすものにしてあかを用ひてこれを表はす、例へばかの時」あの世」の如し。

人代名詞と同じく、指示代名詞にもれ添はりて、これ、それ、かれ、あれとなり、意義に於ては變ずることなし。

又地位を示めすには、こを添へこゝ、そこ、かしこ、あしこなどと用ふ、こは都(宮處)・住處・在處などのかこと同じく、處の意義ある語なり。

疑問代名詞

又方向を示めすには、の方の約なたを添へて、こなた、かなた、あなたとし、或はちを添へて、こち、そち、あちとす。

疑問代名詞は、人・事物・地位・方向に就きて、疑問又は不定の意を表はすものにしてたれ(誰)、いづれ、なに(何)、いづく(何處)、いづかた(何方)、いづち(何處)等あり。

人代名詞			指	
			事物	
第一人稱	第二人稱	第三人稱	近稱	中稱
あ、われ	な、れ	か、れ	こ、れ	そ、れ
あ、われ	な、れ	か、れ	こ、れ	そ、れ

疑問代名詞	遠稱
た、れ	か、れ
た、れ	か、れ
い、づれ	か、れ

示代名詞		
位置	方	向
こ	こなた	こち
そこ	そなた	そち
かしこ	かなた	あち
いづこ	いづかた	いづち
あしこ	あなた	

代名詞の複數は、われわれ(我々)、おのおの(各々)、それぞれ(其々)の如く、同一の語を重ね、或はたれそれ、かれこれ(彼此)の如く、別の語を合せ、又は「ら」、「ども」等を添へて、これを表はすこと、略名詞と同じ。

第四章　數詞

數詞とは、事物の數を表す語にして、國語に於ては、本邦固有の數詞と、漢字を借りて用ふるものと二樣あり。

固有の數詞

本邦固有の數詞は

ひとつ　ふたつ　みつ　よつ　いつゝ　むつ
なゝつ　やつ　ここのつ　とを　はたち
みそぢ　よそぢ　いそぢ　むそぢ　なゝそぢ
やそぢ　ここのそぢ　いほつ　よろづ

などなれども、其發達充分ならずして、一より十までを除きては、其使用特に制限せらる、はたち(二十歳)・はつか(廿日)・みそか(晦日)は歳日に限りて用ひられ、八百萬・湯津磐村等の如きも、單に多數を表はすのみにして、精確の數を示すにあらず、トヲカアマリヒトヒ(十一日)、トヲカアマリフツ

數詞發達の程度

カノヒ(十二日)、ハツカアマリフツカノヒ(廿二日)、ハツカミカノヒ(廿三日)などの如く、一々名詞を繰り返せるにても、十以上の數詞の使用、充分に發達せざりしを知るべし。

ひとつ・ふたつ等のつは、大方の數詞の用ひらるゝ語尾にして、はたちのち、みそちのち、よろづのづ、ちゞのち等皆同じく、もとは獨立の名詞なりきと思はる、されば、これを除きて他の名詞を加へ、

一本　二歳　三日　四方　八度　八十路
千種　百度

の如く用ふべし、卽ち數詞の本體はつを除きたる、ひと、ふた、み、よ、いつ等にあるなり。

一より十迄の數詞の構造を見るに、次に示めすが如く、母音の變化によりて、倍數を表はせりといふ說あり。

數詞の構造

1. hito　2. huta
3. mi　6. mu
4. yo　8. ya
5. itsu　10. towo

母音の變化によりて男女の性を分ち、動詞の自他を區別する等の事は、往々我國語に見ゆる現象なれば、此說も亦大に執るべき所あるが如し。

外來の數詞

漢字を借りて表はす數詞は、一・十・百・千より億・兆に至るまで、如何なる數をも示し得るが故に、精密の計算には主としてこれを用ふ。

數詞が形容詞の如く用ひらるゝときには、ふつか(二日)・みとせ(三歳)の如く名詞に冠らする事あり、或は劍一振・弓二張の如く、名詞と離して用ふることあり、この第二の場合

助數詞

に於ては、數ふる事物の種類によりて、數詞の次に添ふる語に一定の慣習あり、これを助數詞と名づく。

刀一腰　旗二流　家三棟　樹木五株
机六脚　書籍八册　鏡十面

第五章　動詞及び形容詞

第一節　總說

動詞

事物の動作を表はす語を動詞と名づけ、形狀を示す語を

形容詞

形容詞といふ。

語根

動詞・形容詞ともに活用語に屬して、語尾に變化あり、其變化せざる部分を名けて語根といふ。

動詞形容詞各種の活用

動詞の變化に正格・變格の二種類あり、正格は又四段活用・下二段活用・上二段活用・上一段活用・下一段活用の五種に分れ、變格は加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格の四種に分る。

形容詞の變化には、志幾活用・志志幾活用の二種あり。

左に動詞・形容詞の活用表を擧げん。

動詞活用表

正格

	四段活用(行)	下二段活用(得)
將然言	ゆか yuk-a	え e
連用言	ゆき yuk-i	え e
終止言	ゆく yuk-u	う -u
連體言	ゆく yuk u	うる ur-u
已然言	ゆけ yuk-e	うれ ur-e
命令言	ゆけ yuk-e	えよ e-yo

活用

上二段活用(生)	上一段活用(見)	下一段活用(蹴)
いき ik-i	み mi	け ke
いき ik-i	み mi	け ke
いく ik-u	みる mir-u	ける ker-u
いくる ik-uru	みる mir-u	ける ker-u
いくれ ik-ure	みれ mir-e	けれ ker-e
いきよ ik-i-yo	みよ mi-yo	けよ ke-yo

變格活用

加行變格(來)	佐行變格(爲)	奈行變格(往)	良行變格(有)
こ ko	せ se	いな in-a	あら ar-a
き ki	し si	いに in-i	あり ar-i
く ku	す su	いぬ in-u	あり ar-i
くる kur-u	する sur-u	いぬる in-uru	ある ar-u
くれ kur-e	すれ sur-e	いぬれ in-ure	あれ ar-e
こよ ko-yo	せよ se-yo	いね in-e	あれ ar-e

形容詞活用表

	連用言	終止言	連體言	已然言
志幾活用(善)	よく yo-ku	よし yo-si	よき yo-ki	よけれ yo-kere
志志幾活用(惡)	あしく asi-ku	あし asi	あしき asi-ki	あしけれ asi-kere

將然・連用等は、義門の命名する所(但し終止のみは截斷といへり)なれば、左に師の活話指南中より、其定義を引用すべし。

將然言(シヤウゼンゲン) コレカラドリヤト初メカケル、コレカラユクサキヲイフ、但シコレハ一端ニツキテシバラク名ヅケタル名目也、未然言(マダニシカラントスルコトバ)ナドヤウニ云テモ可ナリ云々。

連用言(レンヨウ) 動キ活ク語カラ、動キ用ク言バヘッドク。

截斷言(ヨリタチ川ヘツヾクコトバ)(キレハ) キレテスワルヲ云、言ノトマリ所ナリ。

連體言（レンタイ タイニツ ク）　活キ動ク用ノ言カラ、動カヌ語ヘ連ク、ウゴカヌトハ體ノ語ノ「也」中略コレニ有形無形アリ。

已然言（イゼン スラニシカル）　然アツテスンダ處ナリ、云々已ハチヤント、スンダノナリ、花開ケバト云ニ對シテ考フベシ、咲カバハ未也、咲ケバハチヤント也。

希求言（ケグゲン コヒネガヒヤトムル）　世ニイハユル下知ノ詞也、コハ下知ト云ヒテハ、イカニゾヤ覺ユルトモアルカラニ、云々アラタメテ、希求ト目ケタル也、主君ニムカヒテ、云々シ玉ヘト申ス、玉ヘノヘナド、コレヲ下知トイヒテハ、當ラヌニアラズヤ。

そも〳〵我國語動詞の秩序的研究は、富士谷成章のあゆひ抄に始まり、本居春庭の詞八衢に於て成熟し、其所說は大なる變更なくして、今日に傳はれり、然れども此方面に關する吾人の智識は、甚だ不完全にして、將來の研究に待つべきもの頗る多し。

動詞活用一元論

アストン氏の說

動詞の活用を正格變格の各種と別つは、八衢以來の定說にして、動かすべからざるが如しといへども、尙其淵源を探ぐれば、頗る疑ふべき所あり、今外人にして我國語を研究せし人の所說を見るに其立脚點の異なるが爲め、參考とすべき名論亦尠からず、英人アストン氏の如きその一にして、動詞に關する氏の學說は、載せて其日本雅語文法（Grammar of the Japanese Written Language. W. G. Aston 2nd ed. Yedo. May 1877）にあり、氏は國語の正格動詞を左の如く分類し、

			語根	
第一活用	ゆき yuki	root.	副詞法	
第二活用	うけ uke			
	ゆき yuki	Adverb.	終止法	
	うけ uke			
	ゆく yuku	Conclusive form or Verb.	連體法 名詞法	
	うく uku			
	ゆく yuku	Attributive or Substantive Form.	打消及將然法	
	うくる ukuru			
	ゆか yuka	Base for Neg. and Future Forms.	已然法	
	うけ uke			
	ゆけ yuke	Perfect.		
	うくれ ukure			

第三活用	み mi	いき iki
	み mi	いき iki
	みる miru	いく iku
	みる miru	いくる ikuru
	み mi	いき iki
	みれ mire	いくれ ikure

さて論じて曰く此等の三種の活用中、第一活用は明かに原初の活用にして、他の二種はこれより分れ出でたり、卽ち、第三活用は盡く單綴の語根よりなれる動詞なれば、若し第二活用によらば、活用の際、語根の原形を全く破壞し終るべければ、語根と活用との中間に、r音を挿入して、之を避けたるなり。

此他なほ單綴語根の動詞にして、これと同樣の理由より、活用の樣、甚だ第三活用に似たるものあり、得の如き其一にして、其活用は第三活用の少しく變じたるものに外ならず、而して、第二活用に屬する諸動詞中、語根eにて終れるものは、略此得の復合せるものと解せらる、例へば見ゆは見と得との二よりなれるが如し、第二活用の他の一種、卽ち語根iにて終れるもの、數は、比較的少く、且其內の多くは第一活用ともなることあり、これも恐くは得又は他の單綴語根の動詞の復合よりなれるものなるべし、これを要するに第一活用は原活用にして、第二活用は得の轉用活用、第三活用は單綴活用と見るを得べしと。

チャムバレン氏の說

アストン氏の說は決して完全なりといふべからず、然れども、動詞諸種の活用を其根源に於て一に歸すべしとする、氏の考は眞に傾聽すべき價あり、氏の說を受け繼ぎて、更らにこれを一層發展せしめたるは、チャムバレン氏にして、その說は氏の琉球語研究の論文中(Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language. Yokohama. 1895)に見えたり。

氏の意見は、琉球語の研究に基きたるものにして、これを摘載すれば左の諸項に歸すべし。

(一)その結は琉球語に見えず、こは日本語に特發せる形にして、其時代は日本文學の初期約西曆七百年の頃なり。

(二)日本語に於て、動詞の連體言は常に終止言を同化せんとする傾向

あり。

(三)琉球語にては、動詞の活用日本語よりも複雜したれども、其種類はたゞ一あるのみ。

(四)日本語の動詞活用も、亦本來はこれと同じく、一種なりしならん。

(五)下二段言は、四段言と動詞得との復合せるものなり、其例は所相動詞の如く、意義上より明瞭なるものゝ外、

鰯(カクル)隱　忘(ワスル)

避(サク)　捧(サヽグ)　數(カヾフ)

の如く、單に四段より下二段に轉ぜりと思はるゝもあり。

(六)一段言も、見(ミル)の如きは、試心見(コヽロミル)となりては上二段なれば、二段言の轉訛せるものと見るを得べく、結局は四段言に歸着すべし。

(七)かくの如く、動詞各種の活用盡く四段言に歸するが故に、動詞最古の活用は四段活用なるべし、但し前條述べたるが如く、連用言と終止言とを混同するは、動詞全體の傾向にして、四段言は既にこれを分たず、二段言も俗語に於ては此區別を失へり、(琉球語は今尙此兩者の區別を存す)故に唯此一點に於てのみ、二段言は四段言よりも古き形を存せり。

而して、奈行變格往(イヌ)・死(シヌ)は此等兩活用中の古體を兼有するものなれば、日本語動詞原初の活用に最も近きものは、蓋し此變格なるべし。

以上はチャムバレン氏の學說を摘載したるものにして、其研究のいまだ半途に止まりて、これが完成は將來の國學者を俟たざるべからざること、氏も亦これを認めたり。

動詞形容詞一元論

第二節　動詞・形容詞の活用に關する私見

動詞各種の活用は、その根本に於て一に歸すべしとの說につきて、予も亦此等の諸大家と意見を同くすれども、其

原初活用の形式、又動詞と形容詞との關係につきては、少しく見るところを異にす、左にこれが概要を述べて、敢て大方の批評を乞はんとす。

我國語の形容詞は、善詞・奈麻余美（生善肉）の如き用法を除きては、盡く語尾を活用し、其樣頗る動詞に似たり、予の見るところによれば、形容詞はもと動詞と同一の活用をなしたるものにして、今日の形容詞活用は、此古活用の一部分を傳へたるものなるべし。

先づク・シ・キ・ケレの中、ケレはキアレの約にして、古くは此形なく、虚呂望虚曾赴多弊茂豫者「最今社戀者爲便無寸」の如く、書紀・萬葉にケレの形を用ひず、又シとキとは相轉換することあれば、此場合のシはキより出でたるものと思はる、されば、形容詞活用は結局ク・キの二者となるべし、而して世の文法家此加行音を以て、形容詞活用の特徴として、動詞活用と區別すれども、予の見るところは然らず、かの從來むの延とせるまくのくは、此形容詞活用のくと同一にあらずして何ぞ。

みまくの欲しき玉津島かも

ときつ風吹まくあらずあこの海

其他見良久少「おいらくの來ん」思べらく「曰はく　等のく」皆然り、故に加行音の活用は、形容詞に限られたりといふべからず。

次に、諸種の動詞中、其意義の上よりいひ、活用の上よりいひて、最も根本たるべきは良行變格ありなり。

有	あら	ar-a
	あり	ar-i
	ある	ar-u
	あれ	ar-e

此動詞は其語根の母音を變じて、他動詞う(得)となる。

得	え	e
	え	e
	う	u
	うる	ur-u
	うれ	ur-e

此場合に其活用は變じて下二段となり、毫もありの形を存せざるが如しといへども、此動詞うに動詞ありを加へて其所相を作くるときは。

得	えられ	er-are
	えられ	er-are
	えらる	er-aru
	えらるゝ	er-aruru
	えられ	er-arure

となる、即ちerは得の語根にして、有の語根arの母音を變

じたるものなり、此の如く有得はもと同一動詞根の母音を變じたるものなるにも係らず、其活用は二途に分れ、一は良行變格、一は下二段活用となれるのみならず、動詞有其物も他の動詞根に結び付きて、所相を作るときは、其活用變じて下二段となる、而して此動詞得は他の動詞根と復合して活用すること多く、既に前節に述べたる如く、避忘隱(ワスルカクル)の類尠からず、かの佐行變格動詞爲も亦其一なるべし。

せ	se	
し	si	
す	su	
する	suru	
すれ	sure	

たゞ爲の連用言のみは、得と活用異なれども、此同一動詞が助動詞となりて、使役相を表はす場合には、全く得と活

用を同じくすること左記の如し。

せ	se	su
せ	se	suru
す	su	sure
する	suru	
すれ	sure	

以上の事實は有、得、爲等の動詞活用は、時と處とによりて變遷し、終始必しも一ならざることを證するに足らん、然らば離る、避くの二動詞を、同一語根に有、得の復合したるものと見、直る直すを、同一語根に有、爲の復合したるものと見るとも、亦必ずしも不可なからん。

sak	aru（有）	離	四段活用
	u（得）	避	下二段活用
naho	ru（有）	直	四段活用
	su（爲）	直	四段活用

tsuk	u（有）	盡	上二段活用
	usu（爲）	盡	四段活用

予輩の見るところによれば、動詞に各種の活用を生ぜる所以、多くは有、得等少數動詞の復合に起因せり、例へば

mi	u（得）	見	下二段活用
	ru（有）	見	上一段活用
	ruru（有有）	見	下二段活用
ki	su（爲）	着	下二段活用
	ru（有）	着	上一段活用

之れを要するに、動詞の活用に關する所見は大約次の如し。

(一) 良行變格動詞有と、下二段動詞得とは、自他の關係を有し、其活用は本來同一なりしものと覺ゆる事。

(二)下二段及佐行・加行變格動詞は、動詞爲の復合、若しくは其類推よりなれるものなる事。

(三)上二段動詞も、亦下二段動詞の類推よりなれりと思はるゝ事。

(四)上一段・下一段動詞は有の復合動詞なる事。

(五)故に動詞活用の古體は、これを四段活用、良行、奈行兩變格、及び形容詞の活用中に求めざるべからざる事。

(六)有、爲、得、見等は他の諸動詞と復合するとき、異樣の活用をなすことある事。

大體の觀察は以上の如しといへども、詳細に亙り古活用の本體を探らんこと、容易の業にあらず、今暫く筆を轉じて動詞の法を論じ、然る後再び此問題に及ぶべし。

五十音圖を以て活用を説明せんとする弊

將然法

第三節　動詞の法

此に法といふは、從來各種の活用を五段に分ち、將然言以下已然言に至るまで、五種に區別せるものを指せるなり。此五種の區別(命令法を合せて六種)は五十音圖によりて、動詞の働を説明せんとするより、出でたるものにして、いまだ盡く動詞の變化を網羅せりといふべからず、今先づ從來の分類順によりて、次第にこれを論ぜんとす。

第一活用を從來將然言又は未然言といへり、然れども未來の意は、活用其物の中に存せずして、これに接續する助動詞によりて表はさる、行かむ・押さむの如し、されば若しこれに打消の助動詞を接續すれば、忽ち變じて打消の意

をなす、例へば飛ばず・落ちずの如し、故にアストン氏は此活用を、Base for negative and future form（打消及び未來を形つくる語底）と命名し、廣日本文典には其用法定らざる故を以て、不定法と名けたり。

第二活用は所謂連川言にして、落ち入る・見下すの類なり、アストン氏はこれを Adverbial form と名けたれど、副詞の如く他の動作を形容するものにあらずして、獨立の二動作を複合して、一種の熟語となすものなれば、副詞法の名は當らず。

佐行變格のす（爲）と、良行變格のあり（有）とは、他の動詞の連用法を承けず、即ち他の動詞と複合して一熟語をなすことなきなり、故に狩りす・隔てあり等の場合の狩り・隔ては連用法にあらずして、次條に述ぶるところ

の名詞法なり、此二動詞に限り、此異例ある所以は、思ふにす・ありは他の諸動詞と複合して、或は自他を變じ、或は勢相・使役相等を形つくる作用あるによるものにして、例ば狩るとすとより狩らす（活用は下二段なれど）隔つとありとより隔たる（活用は四段なれど）のなるが如く、各特種の作用を生ずるにより、普通の連用法熟語をなさゞるものなるべし、もとより狩らす・隔たるの如く複合してはす・ありの原活用を失ふといへども、こは他の動詞にも屢見るところにして、例へば見るは上一段にして、試む（心見）・恨む（心見）はいづれも上二段なるが如し。

大槻氏は此第二活用を、連用法以外に、更らに二種に分ち、新たに中止法・名詞法の名目を設けられたり。

中止法とは、文の中間に於て、各自に終止法となすべき動詞を、文の斷絶及び重複を避くるため、暫く其語勢を中止し、後の動詞をして一に之を負はしむるものをいふ、例へ

ば

月落ち(ッ)、鳥鳴く。

身を立て(ッ)、道を行ひ(フ)、名を後世に擧ぐ。

然れども、最後の一動詞が、上なる中止法動詞を代表する程度は、これに附屬する互爾波等によりて、必ずしも一定せず、例へば

松も引き(引かず)若葉も摘まずなりぬるを

といへば、もあるがため摘まずの打消法は上の引きにまで及べと、若し此もをはに換ふれば、

松は引き(引く)若葉は摘まずなりぬるを

となりて、打消法は引くに及ばず、其他廣日本文典に引用したる諸例中、打消法の上に及びたるは、概ね互爾波の力によれるもの丶如し、

身を捨て丶(をも捨てず)憂きをも知らぬ旅だにも山路に深く思ひこそ入れ。

111898

名詞法

終止法

の如きも、若し互爾波はを加へて、身をば捨て憂をば知らぬとすれば、知らぬの打消は捨つに及ばざるを見よ、

名詞法とは動詞の働を言ひ据ゑて、名詞となすをいふ、例へば

疊(疊む)　使(使ふ)　商(商ふ)　謠(歌ふ)

他の動詞又は名詞と複合して、名詞法をなすものあり。

雲行(行く)　早起(起く)　犬死(死ぬ)　花見(見る)

心得(得)　往來(來)

第三活用は終止法(大槻氏の第一終止法)にして、通例の文は此形を以て終を結ぶを法とす。

道を行く　花を見る　子を育つ　衣を着る

書を得　人を恨む　恩を孰ゆ

然るに、此終止法と次に述ぶる連體法とは動詞によりて、形を同じくするものと、せざるものとあるにより、雙方とも誤用を生ずること多し。

利を得る　年を經る　人に教ふる　功を立つる

時　來る　事を爲る

などの如く、尋常の終止に連體法を用ひたるは、何れも非なり。

然れども、若し上に豆爾波そ、なむ、や、かのある時は、下なる動詞は必らず連體法の形を取るべし、大槻氏はこれを第二終止法と名づけられたり、例へば

利をなむ得る　年をぞ經る　何をか爲る

功をや立つる

又、上に豆爾波のこそあれば、下の終止は已然言を用ふるを法とす、大槻氏はこれを第三終止法と名づけたり。

人をこそ教ふれ　花をこそ見れ　木をこそ植うれ

かく上なる豆爾波によりて、終止法の異なる事につきて私見あり、後章掛結の條に說くべし。

第四活用は連體法にして、下、名詞に連りてこれを形容・制限する形なり、例へば

分け行く道　生れ落つる日　世を捨つる人

上二段・下二段に於ては、此法に誤用あること多し、義を唱ふ人、全權を任す證書など皆非なり、何れも第四活用を用ひて、唱ふる人、任する證書とすべし。

第五活用は從來已然言と稱するものにして、大槻氏は單

にこれを第三終止法としてのみ説き、已然の意はこれを
ば、ど、ども等の豆爾波に譲られたれど、予はなほ舊來の説
に從ひ、已然言としてこれを説かんとす、其理由は動詞の
時の條に述ぶべし。
已然法とは、其名の示めす如く、過去の意を表はすに用ひ
らるゝ形にして、例へば

飲めども盡きず　見れども飽かず

なほば、ど、ども等の豆爾波なくして、用ひられたるものも
あり。

古の人にわれあれやさゝなみの古き都を見ればかなしき

第六活用は命令法にして、下知（ゲヂ）、希求（ゲグ）等の稱もあり、其形は
四段活用・良行變格、卽ち活用の古形を保てるものに於て

は、第五活用卽ち已然言と同一なり、そも〳〵命令の意は、
某動作の完成せらるべきこと、卽ち過去なるべきを欲す
るに外ならざれば、已然言を以てこれを表すは、寧ろ當然
の事にして、又此事實より見るも、第五活用に過去の意あ
るを知るべきなり。

早く行け　夙く起きよ　靜に有れ

從來の文法家が説く所の動詞の變化は、以上述べたる六種にて盡きた
れど、予は尙これに左の三種を加へんとす、勿論これ等は凡の動詞に通
じて、用ひられたるにはあらねど、五十音圖を以て、動詞の變化を説明せ
んとする習慣は、常に活用を同行中の音に制限し、偶他行音の加はれる
ものあれば、これが説明を他に求めて、更らに意を活用の古形に注ぐこ
とをなさず、これ實に動詞研究上に横はれる一大障礙なり、今予の説か
んとする所のもの、果して當を得たるか否や、そは未だ俄に定むべから

ずとすとも、上記の主旨に至ては、廣く世の文法家の注意を促すことを憚らざるなり。

(一)くを以て表はす一種の副詞法

此活用は第一活用にくを加へたると同一の形にして、從來これを終止言の延言といへり、例へば

爲(ス)らく　聞(キ)かく　告(ノ)らく　戀(フ)らく　忍(シノ)ばく
給(タマ)はく　取(ト)らく　語(カタ)らく　行(ユ)かく　祈(ノ)まく

然れども、るのらくとなり、くのかくとなるが如く、故なく聲音の延長するは、學理上認め得べき所にあらず、近時また此くを名詞こと(事)の省約せられたるなりと、說く人あれど、いまだ首肯することを能はず。

予を以て見れば、此くは形容詞活用のくと同一性質のものにして、本來は動詞・形容詞に通じて備はりし、一活用なるべし。

朝にけに見まくほりするそのたまを如何にしてかも手ゆ離れざらん
かくしあればいかで植ゑけん山吹の止む時もなく戀ふらくもへば

(二)くを以て表はす一種の名詞法

此活用は、其形全く前のく副詞法と同じけれど、名詞法として用ひられたること、左例の如くなれば、亦一活用として見るべきなり。

梅の花散らくは何處
居らくの奥處も知らず
立てらくのたときも知らず

以上の二活用は、勿論其使用の區域至極制限せられ、何れ

の動詞にも必らずあるべき形ならずと雖ども、予は諸種の事實に徴して、此等が國語動詞活用の古形の一なるを信じて疑はず。

(三)みを以て表はす一種の名詞法

之れに加ふるに、かの難みして、安みして、輕みして、重みして、甘みして等の如き、形容詞に限れるみ形の名詞法も、亦本來は動詞一般にも通用せし形なるかの疑あり、例へば

老見幼見朋友の

などのみこれなり。

又かの去づむ(沈)・去づく(沈)、のぞむ(臨)・のぞく(窺)、去のぶ(忍)・去のぐ(凌)等の如く、相對する動詞にして、く、む(ぶはむと相通ず)兩音によりて、意義の差異を示せるものは、上記名詞法の古形くみより、更らに活用せるものにあらざるか。

sidsu {ku (沈) / mu (沈)}

nozo {ku (窺) / mu (臨)}

sino {ku (凌) / bu (忍)}

かくくみより更らに活用することは、形容詞に於て屢見る所にして、例へば廣ぐ・廣むの如し、故に上記の假定必しも臆斷とはいひ難からん、之を要するに、從來の文法家が目して活用としたるものゝ外に、なほかく數種の活用の古形あるは蔽ふべからざる事實なり。

以上論じ來りたる所によりて、暫く我國語の動詞活用の古體を假定せば、左の如くなるべし。

(1) ----	語根
(2) ----a	不定法
(3) ----i	連用法
(4) ----i	中止法
(5) ----i	名詞法
(6) ----ku	
(7) ----mi	
(8) ----u	終止法
(9) ----ru	連體法
(10) ----e	已然法
(11) ----e	命令法
(12) ----ku	副詞法

此内、(2)(3)(4)(5)(10)(11)は、四段・奈行・良行變格により、(8)は四段・奈行變格等により、(9)は上・下二段・奈行變格等により、(7)(12)は形容詞及び一部の動詞活用によれるなり。

第四節　動詞の活用に關する各論

第一、四段活用

此活用は最も多く古體を保てるものゝ一にして我國語動詞の多數はこれに屬す。

此活用に屬する動詞根の語尾は、カ・サ・タ・ハ・マ・ラ六行中の子音に限り、其語尾變化はア・イ・ウ・エの四母音に亙れり、故にこれを名づけて四段活用といふ。

不定法	連用法	中止法	終止法	連體法	已然法	命令法
行						
yuk-a	yuk-i	yuk-i	yuk-u	yuk-u	yuk-e	yuk-e

四段活用所屬の動詞中、其活用の紛らはしきもの、或はまた他段の活用と兩樣に働くものゝ二三を擧ぐれば、

よく(避)　よく處なき秋の夜の月など、用ひたるは四段活用にして、別に下二段に働く同意の動詞あり。

いく(活)　此動詞も亦いける日、いく藥など、四段にも用ひ、又上二段にも用ひたり。

四段と下二段との兩樣に活用する語

ならはす(習)　ならはす人などと四段に用ひたるは、物を然する意にして、卽ち他動詞なり、又人にならはせなどすと用ひたる場合には下二段にて、使役相の動詞となる、此兩者形相似て紛らはし。

にほはす(匂)　も亦四段と下二段とありて、四段の方は他動詞にして、藤袴くる秋毎に野邊を匂はす」など丶用ひ、下二段の方は使役相の動詞にして、梅が香を櫻の花に匂はせて」など丶用ふ、兩者互に區別せざるべからず。

みつ(滿)　も亦四段と下二段とによりて區別あり、植滿つる田の面の早苗水みちて濁りなき夜の影ぞ見えける」の、滿つるは下二段の他動詞にして、みちては四段の自動詞なり。

此外、後世下二段に活ける動詞にして、古く四段なるもの多し、懼(オソルカクル)隱(リスル)忘(ワスル)・隔(ヘダツ)・止(トヾム)等の如き、人の耳におそり」、み山がくり」、妹は忘らじ」、白雲の千邊にへたてる筑紫の國」、花の盛をとゝ

下二段活用

下二段活用の起原

みかね」など用ひられたるは、何れも四段なり。

第二、下二段活用

下二段動詞根の語尾は、母音ェ、及び各種の子音にして、其變化はェ・ウ・ウル・ウレの四種なり、故に正しくは四段に活用するものなれど、母音の變化はェ・ウの二種なれば、他のル・レは暫く除きて、從來これを下二段と名づけたり。

下二段活用中の最も主要なる動詞は、良行變格あり(有)の他動形う(得)にして、其他は多く此う(得)の複合せるものか、或はこれが類推より生じたるものなり。

動詞う(得)他の動詞と複合するときは、其他動形となり、動詞あり(有)・す(爲)他の動詞と複合し、動詞う(得)に類推して下二段となるときは、其勢相所相及び使役相となる。

(一)う(得)の複合して他動詞となる例。

あく(明)四段　自動　はしる(走)四段　自動
あく(開)下二段　他動　はす(馳)下二段　他動
さかる(離)四段　自動　あつまる(集)四段　自動
さく(避)下二段　他動　あつむ(集)下二段　他動

(二)良行變格あり(有)の複合して、所相或は、勢相となる例。

うつ(打)四段　他動　みる(見)上一段　他動
うたる(被打)下二段　所相又勢相　みらる(被見)下二段　所相又勢相
うらむ(恨)上二段　他動　おそる(恐)下二段　他動
うらみらる(被恨)下二段　所相　おそれらる(被恐)下二段　所相

(三)佐行變格す(爲)の複合して、使役相となる例。

よむ(讀)四段　他動　にほふ(匂)四段　自動
よます(讀)下二段　使役相　にほはす(匂)下二段　使役相

複合動詞其原活用を失ふことある場合

もつ(持)四段　他動　おす(押)四段　他動
もたす(持)下二段　使役相　おさす(押)下二段　使役相

其他動詞の語根に、あり(有)・す(爲)・う(得)の複合して、其自他所相能相使役相等を作ること、左の諸例の如きものあり。

うむ(生)四段　他動
うまる(生)下二段　自動　あり(有)の複合せるもの
くらす(暮)四段　他動　す(爲)の複合せるもの
くる(暮)下二段　自動　う(得)の複合せるもの
ながす(流)四段　他動　す(爲)の複合せるもの
ながる(流)下二段　自動　あり(有)の複合せるもの
はらす(晴)四段　他動　す(爲)の複合せるもの
はる(晴)下二段　自動　う(得)の複合せるもの

此等の場合にあり、すは其生得の活用を失ひて、或は四段、或は下二段活用となること、上例に示すが如し、獨りあり、す等のみならず、上一段活用

みる(見)の如きも、複合動詞としては、下二段活用となること多し、例へば

あがむ　(敬)　上げと見るとの複合動詞

あらたむ　(改)　新と見るとの複合動詞

おとしむ　(襲)　落すと見るとの複合動詞

きはむ　(究)　極と見るとの複合動詞

ながむ　(眺)　長と見るとの複合動詞

以上の諸例は、動詞の活用に變遷ある事と、幷びに、下二段活用中に、類推によりて、他の活用より移り來りたるものある事とを、示さんがために擧げたるなり。

四段活用と、下二段活用とは、相紛るゝこと多し、よく其所屬を分ちて、混ぜざる樣注意せではあるべからず、例へば、あむす(浴)・かよはす(通)等四段に屬する動詞を、あむせん・かよはすれば など、下二段の如く活し、又まかす(任)・あはす(合)等下二段に屬するものを、まかして、あはさんなど、四段の如く活かすは、何れも非なり。

上二段活用

上二段と四段と兩樣に活く動詞

第三、上二段活用

上二段活用は中二段活用ともいふ、此活用に屬する動詞の語根は、カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラ六行中の子音にて終り、語尾變化はイ・ク・クル・クレの四種あり、然れども、暫く其中の母音のみを數へて、上二段活用と名づけたるなり。

	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法	命令法
生	ik-i	ik-i	ik-u	ik-uru	ik-ure	ik-i-yo

上二段に屬する動詞の數は多からず、又四段と上二段と兩樣に働くものもあり、例へば

いく(生)　四段　いつまでいかん生ぞ

上二段　来なんとすれど、いくる人ぞいとつらきや

まなぶ(學)は通例四段活用なれども、文の道を學びず」など
と用ひては上二段なり、其他すさむ(荒)・くやしむ(悔)・たふと
む(尊)等は四段なれども、すさぶ・くやしぶ・たふとぶとなり
ては上二段ともなる、此類なほ多し。

上一段活用

第四、上一段活用

此活用に屬する動詞の數は極めて僅少にして、漸く十數
語あるのみ、既に前節に述べたるが如く、此活用の動詞は
あり(有)の複合したるものなれば、語根はあり(有)と同じく、
ラ行の子音にて終れり。

ほす(干)　四段　す(爲)の複合せるもの
ひる(乾)　上一段　あり(有)の複合せるもの

故に其語尾變化は、母音ウ・エの二種なり。

	不定法	連體法	已然法	命令法
見	mi	mir-u	mir-e	mi-yo

名詞法　中止法　連用法　終止法

然るに、下二段の場合と同じく、語根に屬する子音rを、活
用と誤解し、且これを除去したる殘部は、常に同一の形態
を保ちて、一定せるが故に、これを一段活用と名づけたる
なり。

下一段活用

第五、下一段活用

此活用に屬する動詞は、僅にける(蹴)の一語あるのみ。

	不定法	連體法	已然法	命令法
蹴	ke	ker-u	ker-e	ke-yo

名詞法　中止法　連用法　終止法

上一段に對する予輩の見解にして誤ることなくんば、下一段動詞は正に上一段の中に編入せらるべき性質のものなり、何となれば此等の二活用は、何れもあり(有)の複合動詞にして、語尾變化は等しくゥ・エの二母音に過ぎざればなり。

以上五種の活用を稱して正格活用といふ。

第六、加行變格活用

第七、佐行變格活用

加行變格

佐行變格

加行變格はく(來)の一語にして、佐行變格はす(爲)・おはす(坐)の二語なり、而して此兩種の變格活用は、其變化略下二段と同一にして、たゞ一二の差異あるのみ、今之れを對比するに、

	不定法	連用法・中止法・名詞法	終止法・連體法	已然法	命令法
下二段(得)	e	e	u	ur-u	ur-e	ur-e	e-yo
加變(來)	ko	ki	ku	kur-u	kur-e	kur-e	ko-yo
佐變(爲)	se	si	su	sur-u	sur-e	sur-e	se-yo

されば、此兩種の變格はもと、あり(有)若しくはう(得)の複合詞にして、後稍其活用の轉變せるものなるべし。

二段活用・二段活用・加行・佐行變格を、くに活用せしむれば、いづれもうらく、みらく、くらく、すらくとなりて、其不定法にr形を生ず、これ亦此等の諸動詞が、ありの複合詞なることの一證とすべし。

變格す(爲)は、諸種の名詞及び漢語と複合して、一動詞とな

ること多し、例へば、よみす(嘉)・こゝろす(心)・おもんず(重)・かろんず(輕)・あまんず(甘)・論ず・議す等の如し、此等は總て、す(爲)と同一の活用をなすべきなれば、議さずなど用ひたるは非なり。

第八、奈行變格

此活用は前節に述べたるが如く、最も多く古形を保てるものゝ一にして、其樣恰かも四段と下二段とを合せたるが如し。

	不定法	連用法	中止法	終止法	連體法	已然法	命令法
往	in-a	in-i	in-u	in-uru	in-ure	in-e	

此活用に屬する動詞は、いぬ(往)・ゑぬ(死)の二語なり、此活用を四段の如く誤用し、死ぬ人死ねどもなど用ふることあり、注意すべし。

第九、良行變格

此活用は終止法を除きたる他は、全く四段活用と同くして、あり(有)・をり(居)・はべり(侍)・いまずかり(在)の四語あるのみ。

	不定法	連用法	中止法	終止法	連體法	已然法	命令法
有	ar-a	ar-i	ar-i	ar-u	ar-u	ar-e	ar-e

我國語の動詞活用に各種の別を生じたるは、主として動詞あり(有)の複合より起るものにして、自他・所相・使役相等に至るまで、凡そ動詞に關する變化には、多少此動詞ありを以て、これを觀察せざるべからず。

第五節　形容詞の活用

形容詞は主として、事物の形狀を表はす語にして、其活用に志幾活用・志志幾活用の二種あり。

	語根	中止法・副詞法	終止法	連體法	已然法
志幾活用	よ	よく	よし	よき	よけれ
	yo	yo-ku	yo-si	yo-ki	yo-kere
志志幾活用	あし	あしく	あし	あしき	あしけれ
	asi	asi-ku	asi	asi-ki	asi-kere

形容詞の活用はかくの如く佐行・加行を混じたれば、これを以て形容詞活用の特質となし、動詞活用より區別せんとする說あれども當らず、動詞として必ずしも同行音のみを以て變化するものにあらざること、告る・告らくとなり、曰ふの曰くとなるにても知るべく、又形容詞の變化も上記以外に、尙數ゐること以下述ぶるところの如し。

形容詞活用の發達

形容詞活用の多數を占むる、加行音變化はもと動詞にも備れりしこと、既に前章に於て縷々論ぜし所にして、動詞形容詞一體論は予の宿說なり、卽ち古くは同一活用なりしものゝ中、加行音變化は多く形狀を表はす活用言に用ひられ、他の動作を示めす活用言には適用せらるゝことは稀なるより、一方にのみ發達を恣にし、やがて別派の活用となり、こゝに動詞より離れて、形容詞の變化を見るに至れるなり、故に形容詞活用は其起源比較的新しく、萬事不備なるところ多し、例へば其已然法けれの如きは、きとおれとの複合せるものにして、萬葉以前には此活用なく、衣こそ二重もよき、もはら今こそ戀はすべなき、など、尋常の終止法にてこそを結べり、助動詞如しは全體形容詞の活用をなせども、如けれといふ

形なく、其他平(ヒラ)けし・明(アキラ)けしなど已然法を備へざる類、なほ多し。

志幾活用の語根を重ね用ふるときは、志志幾活用となる、重々し・輕々しの如し。

志志幾活用の終止法にもしを重ぬると思ひ誤りて、重々しゝ・輕々しゝ、惡しゝ・惜しゝなど用ふるは、いづれも非なり、又著(イチジル)しは志幾活用のきるしより出でたるものなれば、いちぢるきとすべきを、いちぢるしきと用ふること多し、改めざるべからず、但しかたくなしき、かたくなきなど雙方に用ひらるゝもあり。

形容詞は、語根の外普通に終止法・連體法・中止法・副詞法・已然法の五種に分つ、而して各法の性質は、略動詞の場合と同じ。

形容詞の語根は、名詞・動詞・形容詞等と合して、熟語となる

こと多し、例へば

淺瀬(アサセ)　長夜(ナガヨ)　悲妹(カナシイモ)　細長(ホソナガ)し

深緑(フカミドリ)　遠離(トホサカル)　空煙(ムナシケムリ)　近寄(チカヨ)る

副詞法　此法は次の連體法と同じく、形容詞活用中の主要なるものにして、

善く讀む　高く飛ぶ　樂しく暮す

此く、は、動詞いはく(曰)・のらく(告)のくと同一のものにして、其他晴(ハル)(下二段)の遙(ハルカ)となり、はるかす(四段)となる、そのか、又おほし(多)のおほきし(大)、よく(善)のよけくとなる、そのき、くは、いづれもこれと同原のものなるべし。

副詞法のく、あり(有)と結びてかりとなり、良變の活用をなすこと多し、善からむ、なかれの類これなり、

晴　遙　haru / haru-ka / haru-ka-su

多　大　oho-si / oho-ki-si

中止法

中止法は動詞の場合と全く異ることなし、例へば

山高く、水清し。

讀み善く、書き惡くし。

の如く、文の斷絶及び重複を避くるため、一時語勢を中止し、後の形容詞をして、これを代表せしむるものをいふ。

終止法

終止法は文の終を示めすものにして、例へば

月清し　夜深し

の如し、そ、なむ、や、こそ等の下は、文の末なりとも、これを結ぶに終止法を以てせず、別に其定あり、卽ちぞ、なむ、や、かは連體法を用ひ、こそは已然法を用ふ、よりて此等に第二終止法・第三終止法の名を附する事、動詞の時に同じ。

連體法

連體法は、下、名詞に續く形にして、例へば

高き山　深き水

已然法

已然法は既に前に述べたるが如く、きとあり(有)の已然法あれとの複合したるものなれば、これに過去の意あること論を要せず。

遠けれども行く

淺けれども渡らず

此法の比較的新しく發生せるものなること既に說けり、かの副詞法くのあり(有)と複合することなど參照すべし。

以上の諸法の外、なほ動詞と同じくく、みと變化して、名詞法をなすことあり。

くの名詞法　戀しくの多かる我」の類

みの名詞法　安し(ヤスシ)・重し(オモシ)ての類

此兩種の名詞法は、其間多少意義を異にし、くの方は具體的、みの方は抽象的の意あるが如し、廣しより轉じたる二動詞廣く、廣むは蓋し此二名詞法より出でたるものなるべしと考ふ。

廣し　hiro-si　(形容詞)

廣く　hiro-k-u　(下二段具體的)

廣む　hiro-m-u　(下二段抽象的)

然れども、なほ廣く類を集め、動詞の場合をも參照して研究を積まざるべからず。

みの名詞法より轉じて、四段活用の動詞となるもの多し、惜む・苦しむ・樂しむ・やすむ(安、休)等なほ多し。

大槻氏は此みをげ、さと同じく接尾語に數へられたり。

第六章　助動詞

助動詞とは、獨立して使用せらるゝことなく、必ず他の動詞又稀には形容詞・名詞等に結び付きて、これに一定の意義を添ふるものをいふ。

助動詞の變化は、動詞・形容詞に似て、又足らざるが如きところあり、此の如く其使用に於ては制限せられ、其變化に於ては缺くるところありといへども、助動詞の活用中に

は動詞に於て見るべからざる古形を存し、研究上よりいはゞ反つて動詞の上に位すべきものあり。

助動詞を分ちて左の十種とす。

(一) 所相助動詞
(二) 勢相助動詞
(三) 使役相助動詞
(四) 指定助動詞
(五) 打消助動詞
(六) 過去助動詞
(七) 未來助動詞
(八) 推量助動詞
(九) 詠歎助動詞

(一〇) 比況助動詞

所相・勢相・使役相の三種は、從來これを自動詞・他動詞と一括して、自他の區別と稱せり、今左に新舊の分類法を對照すれば、

所謂自他の區別

(一) 自から然る、みづから然する——自動詞　　自動詞

例へば、花咲く、鳥飛ぶの如く自から起り、若しくは獨り自からする動作を自動と稱す、其中舟陸に向ふの如く、動作の標準あるものを、有對自動といひ、然らざるものを、無對自動といふ。　　有對自動　無對自動

(二) 物を然する——他動詞　　他動詞

例へば、人を敎ふ、子を養ふの如く、他の事物の上に及ぶ動作を他動と稱し、又其中に人に讀書を敎ふの如く、更らに一の標準を要するものを複對他動といひ、然らざるものを單對他動といふ。　　複對他動　單對他動

(三) 他に然さする——使役相　　使役相

人を待たす、花を折らずの如く、他を使役して動作をなさしむるを使役相といふ。

勢相

(四)おのづから然せらるゝ――勢相

善く覺えらる、然思はるの如く、おのが力にてなし得らるゝ意を示めすものを勢相といふ。

所相

(五)他に然せらるゝ――所相

人に頼まる、親に育てらるの如く、動作他より出でゝ、これを受くるものを所相といふ。

以上は古人が自他の別と稱へ、一括して論ぜし程ありて、其活用の構造自から相關聯せり、而して此等の場合に於ても、亦あり(有)・う(得)・す(爲)の諸動詞は各種の變化の原因たること、動詞諸活用の時に於けるが如し。

左にあり(有)・う(得)等の複合によりて、自他を變ずるもの數種を擧ぐ。

有、得、爲等の複合によりて自他及び諸相の別を生ずる事

(一)う(得)の複合によりて、自動詞より他動詞となるもの。

自動詞		他動詞	
退く(シリゾク)	四段	退く(シリゾク)	下二段
平ぐ(クヒラ)	四段	平ぐ(クヒラ)	下二段

(二)う(得)の複合によりて、他動詞より自動詞となるもの。

他動詞		自動詞	
碎く(クダ)	四段	碎く(クダ)	下二段
解く(ト)	四段	解く(ト)	下二段

(三)う(得)とあり(有)との複合によりて、自他の別るゝもの。

自動詞		他動詞	
改まる(アラタ)	四段	改む(アラタ)	下二段
代る(カハ)	四段	易ふ(カ)	下二段

座る	四段	据ゑ	下二段
廢る	四段	捨つ	下二段

(四)‖あり(有)の複合によりて、他動詞より自動詞となるもの。

自動詞		他動詞	
分る	四段	分く	四段
連る	四段	接ぐ	四段

(五)‖あり(有)の複合によりて、自動詞より他動詞となるもの

自動詞		他動詞	
舞ふ	四段	廻る	四段

(六)‖す(爲)の複合によりて自動詞より他動詞となるもの。

自動詞		他動詞	
動く	四段	動かす	四段
盡く	上二段	盡す	四段
照る	四段	照す	四段
暮る	下二段	暮す	四段

(七)‖あり(有)・す‖(爲)の複合により、意義の異る他動詞となるもの。

他動詞		他動詞	
覺る	四段	諭す	下二段
借る	四段	貸す	下二段
着る	上一段	着す	下二段
買ふ	四段	返へす	四段

但し、此の如く複合して、別箇の動詞となるとき、‖あり(有)・す‖(爲)等は、原活用より轉じて、他の活用に移ること、各語の下に附記したる如くなり、以下所相・勢相等の場合も亦之れに準ず。

第一節　所相助動詞

所相は、四段と奈變・良變とには、其不定法に助動詞るを連ね、其他の活用には、不定法にらるを連ねてこれを造る。

不定法	中止法	終止法	連體法	已然法	命令法
行（ユカ）れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
見（ミ）られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ

所相助動詞は下二段と同一活用をなせども、其起原はあり(有)なり、而してらるはると相並びて一箇の助動詞と見做されども、其實らるのらは動詞根に屬すべきものにして、結局所相の助動詞はるの一種に歸すべし、其故は下二段ら(得)の如き、本來あり(有)の變化したるものなれど、單獨にては、原形を失ひてえらとなり、所相に於てのみ、尚其舊形を存して、えらるとなれば、えらは語根にして、るのみこそ所相助動詞といふべければなり。

有	ar-u	
得	u	(語根)er
被得	er-aru	(所相)

其他の諸活用に於ても、亦これと同じく、所相に眞の語根を存す。

生	ikir-aru	上二段	變
着	kir-aru	上一段	變
見	mir-aru	上一段	佐
似	nir-aru	上一段	加
爲	ser-aru		
來	kor-aru		

此等の諸動詞は、既に動詞の活用の條に論ぜしが如く、何れも語根とあり(有)との複合より、諸種の活用を生じたるものにして、所相に於て眞の語根を現はせるなり、されば所相にらるを要せざる、四段と奈變とのみ

は、あり(有)の複合せざる動詞といふべし、此等は活用を論ずるには至要の關係を有するものなれば、なほ一層の研究を積まざるべからず、今は唯私見の一として此に附記するのみ。

能相の動詞、所相となるときは、其主變じて所相の標準となる。

主	目的	能相
犬	人を	嚙む

主	標準	所相
人	犬に	嚙まる

語根良行音にて終れる動詞の所相は、良行音多く重なるが故に、これを避けて其中の一を省くことあり、忘れらるゝ(wasu-re-ra-ru-ru)を忘らるゝ(wasu-ra-ru-ru)といふが如し、されど下二段にて任せらるといふべきを任さるといひ、又名詞若しくは漢語とす(爲)と結び付きて、何せらるといふべきを、何さるといふは認められず。

第二節　勢相助動詞

勢相の助動詞は、所相と同じくる、らるの二種にして、諸動詞に接續する方法、亦彼と異ることなく、唯勢相には所相の如く標準の語なきのみを差異とす、この助動詞の本體も亦あり(有)なり。

	勢相
讀む	讀まる
受く	受けらる

見る　見らる
爲　爲らる
有り　有らる

勢相の意稍轉じて、動作自から起りて禁じ難きをいふことあり、故郷忍ばる、行末思はる、の如し。

所相・勢相のれ、る、るゝ、るれは、古くえ、ゆ、ゆる、ゆれとも用ひられたり、これも多くは羅行音の重なるを忌みて、也行音に轉じたるによる、寐られぬにを寐らえぬに（nera-re-nuni—nera-ye-nuni）摺らるなを摺らゆな（sura-ru-na—sura-yu-na）とする類なり、其他今日も尚用ひらるゝ所謂・所有も亦、原はいはるゝ、あらるゝより出でたるなり。

使役相助動詞

第三節　使役相助動詞

使役相を表はす助動詞はす、さす、しむの三なり、其中すは四段と良變・奈變との不定法を受け、さすは其他の活用の不定法を受く、しむのみは凡の活用を通じて其不定法に連る。

不定法	中止法	終止法	連體法	已然法
行せ	せ	す	する	すれ
受させ	させ	さす	さする	さすれ
見しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ

右の中すは佐變す（爲）より出でたるものなるべく、其中止法せのみは佐行變格と異なれど、此二者何れか古體なる

べき、これまた一の疑問なり、予は助動詞す の活用を以て、寧ろ動詞す(爲)の活用よりも古きものなりとす、卽ちす(爲)は下二段活用に屬し、う(得)と同じく、あり(有)と關係ある語なるべしと考ふ、尙前章動詞活用の條を參照すべし。

要するに、使役相助動詞す は其活用は佐變す(爲)と異なれど、原は同一動詞なること疑なく、使役相の要素は此動詞す(爲)なり、はげむ(勵)の他動形はげます(勵)の如きも、活用は四段なれど、其意は使役相にして、す(爲)の複合したりと思はるゝことなど、合せ考ふべし。

四段・奈變・良變の外は、任せさす・見さすの如く、すにさを加ふるは如何、予に一つの私見あれど今暫くいはず、但、此等の場合には、す(爲)の複合によりて他動詞を造くるもの多く、此と區別せんが爲めに、新しく此形を生じたるものなるべしとも思はる。

自動	他動	使役相
起く	起す	起さす
浴む	浴す	浴さす
降る	降す	降さす
落つ	落す	落さす
懲る	懲す	懲さす
着る	着す	着さす

ゑむ、さすは凡て不定法に連るを法とす、されば得しむ、見しむ、任せさすとあるべきを得せしむ、見せしむ、任さすと誤用することあり、又漢語名詞にはす(爲)連り、更にこれより使役相となりて、勉强せさす、商せさすなどあるべきを、勉强さす、商さすと用ふる等、凡て非なり、又下二段見すの使役相見せしむと、一段見るの使役相見しむとは、亦區別して混ぜざらんことを要す。

人を使役する意、己が力にて爲し得らるゝ意より轉じて

使役相勢相の助動詞は、崇敬の意を表はす敬相となることあり、使役相と勢相とを重ねて用ひ、又はなほこれに召す、給ふなどを添ふれば、一層尊敬の意を増す。

聞く
聞かす
聞こし召す
聞こし召さる
聞こし召させらる

聞かすは下二段にあらずして四段なり、知らす、立たすなどもこれと同じく、活用は四段なれども、何れも す(爲)の複合して敬語となれるなり。

第四節　指定助動詞

左の三助動詞は事物を指し定むる意あり。

不定法	中止法	終止法	連體法	已然法	命令法
行(ユク)	なら	なり	なる	なれ	
父(チチ)	たら	たり	たる	たれ	たれ
見(ミル)	べく	べし	べき	べけれ	

中止法 副詞法　終止法　連體法　已然法

(一)なり　は「にあり」の約れるものにて、活用も良變あり(有)と同じ、諸動詞及形容詞の連體法に連なり、又名詞・副詞等を受くる事もあり、任(マカ)するなり「爲(ス)るなり「善(ヨ)きなり「主(ナル)なり。

なりの語原はにありなれど、既に約まりて其形を改むる以上は、これを

獨立の一動詞と見て、あり(有)と對立せしむる方然るべし、卽ちあり(有)は單純に存在を示し、なり(也)は本質・性容を指示するものと見て可ならん、されば、武藏なる(ニアル)隅田川の如く、なほ其語源に溯りて、にとありとに分解して考ふべきものと、「これは隅田川なり」の如きものとは、決して同一視すべからず、卽ち一つはにとありとの二語音調のため暫く相結び付けたるものにして、一つはなりといふ一箇の動詞なり、此最明瞭なる區別は何故かいまだ從來の文法家に認められず、これが爲め「武藏なる隅田川」は正しけれど、「顏回なる人」は不可なりなど、論ぜらるれど、もし玄かいはは「これは隅田川なり」といふなりをもにありと解せざるべからず、かくてなほ其意義通ずべしや、要するに「顏回なる人」のなるは「武藏なる隅田川」のなるとは別箇の語なることだに辨へなば、凡の疑は自から解せらるべし、もし「顏回なる人」の如き、指定のなりの連體法は、古く用例を見ずといはゞよし、これを以て文法上の誤用とするは斷じて不可なり。

(二)たり　は「とあり」の約まれるものにして、名詞の下にのみ付く、其意義は「にてあり」なり、人の師たるもの」君たり臣たりの類をいふ。

(三)べし　は未來を推定する語にして、諸動詞の終止法に連る、但し良變のみは連體法に連るを法とす。

かく助動詞の接續法に於て、良變のみに除外例ありて、他の諸活用にて終止法たるべきを、これのみ連體法なるは頗る奇し、或は良變の終止法はもと其連體法と同形なりしがためにあらざるか、動詞の研究上注目すべき現象なり。

べしは終止法を受けて來べし・爲べし・見るべし・受くべし・觸るべしなどあるべきを、誤りて來るべし・爲るべし・爲べし・受けべし・觸れべし・觸るべしなど用ふることあり、注意すべし。

第五節　打消助動詞

打消の助動詞は左の三種あり。

不定法	中止法	終止法	連體法	已然言
押ず	ず	ず	ぬ	ね
爲ず	まじく	まじ	まじき	まじけれ
行ず	じ	じ	じ	じ

(一)ず　は單純に動作を打消す語にして、諸動詞の不定法を受く、行かず・落ちず・見ず・有らず・來ずの如し。

此助動詞は、佐行と多行とに跨り活用して、其樣他の助動詞と同じからず、而して古くは鶴寸乎白土(不知)和素邏珥(不忘)取久乎不知」の如く、にを中止法としたるもあり、且禁止の詞にな(他辭乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背)あり、形容詞無の語根になあれば、ずぬねのぬねは此等のなにと共に、元はなにぬねと活きしものにして、すはじと同活のものなりしならんかとは然るべき說なり。

(二)まじ　は未來を推量して、打消す語なり、凡て諸動詞の終止法(良變のみは連體法)を受けて、行くまじ・見るまじ・爲まじの如く用ひらる。

爲まじき・爲るまじき・任せまじ・恨みまじなど凡て非なり。

まじのまは蓋し見るより出でたるものなるべく、未來の意も亦其內に含まれたり、めり(見、有)・まし(見、爲)・む(見)・しむ(爲、見)等推量未來使役の助動詞と對照して考ふべし。

(三)じ　は其活用聊か缺けたれど、其形より推せば、前條の

まじのまを除きたるものにして、其意義も從つて彼よりも稍強し、常に諸動詞の不定法に連りて、行かじ・爲じ・有らじなど用ひらる。

活用は無論異れど、ず(爲)とず(不)、まし(推量)とまじ(打消)、清濁によりて意義に表裏の差あるを思へば、此等のし、じずともにもとは動詞爲に出でゝ、濁音の方は其前に打消のな(今は禁止の副詞)のありたるが省かれたる結果、濁音を帶ぶるに至れるものか。參らんとする、參らんずる、參らずるの如き、聲音變化を合せ考ふべし。但しこれはいまだ予の定見といふにはあらず、たゞ疑を存して後の說を待つのみ。

第六節　過去助動詞

これより動詞の時を表はす助動詞を說くに先ち、動詞の時全般に關して聊か述べ置くべし。

時を分ちて、現在・過去・未來の三部とす、これ等は其區別明かなれば、殊更に說くことをなさず。

過去を更らに分ちて、半過去・過去・大過去の三とす、半過去は過去の中にて最も現在に近きもの、卽ち過ぎ去りて程經ざるものをいひ、大過去は過去の意を強むる場合、卽ち動作の確かに終りて跡なきをいふに用ふ。

この三種の過去につき假定・推量する場合には、これに未來を加へて用ふ、かくてまた通常の未來の外に、三種の過去未來を生ず。

國語に於て動詞の時を表はすには、概ねこれに種々の助動詞を加ふ、然れども亦動詞自個の活用中にも、過去・未來の區別を備へざるにはあらず、卽ち(一)終止法は現在、(二)連

現在
過去

體法は未來、(三)已然法は過去を表せり。

(一)終止法に現在の意あること更に論なし、行く・任す・見る・爲る等これなり。

(二)已然法に過去の意あることは、既に古人も認めし所なるに、近來これに反對する人ありて、已然法のみにては時を示さず、ば、ど、ども等の豆爾波加はりて後、始めて過去の意義生ずといへり、然どもば、ど、ども等其者にも又過去の義なきは、風吹かば(未來)、風吹けば(過去)、酌むとも(未來)、酌めども(過去)等の例を對照すれば自から明瞭たるべし、ば、どの濁れるは音便のためにて清濁いづれも同語なり、而已ならず。

古の人に我あれやさゞなみの古き都を見れば悲しき

の如く、豆爾波なく已然法のみにて過去を表はすものさへあるをや、予の私見によらば、已然法はもとう(得)の複合したるものにして、これが爲めに過去の意を生じたるものなるべし、卽ち行けは yuk+e にして、e は得の語根 ei の約まれるなり、う(得)の已然法うれは、同一語根を二重に重ねたるものにして、卽ち ei+ei より eie となり、更に母音を變じて ure となれるものなるべし、英語に於て do(爲)の過去は do-do の約 dide にして、これより諸動詞の過去尾辭 ed を生じたると其樣頗る似たり。

四段と良變こに於て、命令法が已然法と一致せることは、亦已然に過去の意あるを證するに足る、そは命令は動作の施行、卽ち過去たるべきことを促すものなればなり、さ

れば已然言ならぬは大抵別に感動詞よを添へて、立(タ)よ・來(コ)よ・見(ミ)よなど用ひたり。

(三)連體言に未來の意義あることは前人のいまだ說かざ所なり、然れども其用例によりて考ふるに、常に未來の意を含めり、例へば、忍ぶることのよわりもぞする」見る人其心せよ」いつかは雪の消ゆる時ある」の如き忍ぶ、見る、消ゆるを忍びん、見ん、消えんと改むとも、其意義大差なし、又やの掛を結ぶ語は意義上必らず未來の語(君や來ん、我や行かん」一年を去年とやいはん、今年とやいはん」の如き)來べきものにして、而も其形は必ず連體法たり。

來むといひし程や過ぎぬる秋の野にたれまつ蟲の聲の悲しき

夜やくらき道やまよへるほとゝぎす我宿をしも過がてに鳴く

助動詞によりて表はさるゝ時の區別

此等は皆其意義は未來にして、形は連體法なり、連體法に未來の意義なくば、斯の如き用法生ずべき謂れなきなり。

偖助動詞によりて表はさるゝ時の中、先づ過去に付きていはゞ、凡次の四種あり。

不定法	中止法	終止法	連體法	已然法	命令法
行(ユキ)	て	つ	つる	つれ	てよ
讀(ヨミ)	て	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
立(タチ)	たら	たり	たり	たる	たれ
有(アリ)	けら	けり	けり	ける	けれ
生(ウマレ)			き	し	しか
紅葉(モミデ)	せら	せり	せり	せる	せれ

此等の助動詞は、其もと何れも獨立の動詞より出でたる

を以て、諸動詞のこれに連るも亦皆連用言なり、但し一二の例外あり、以下各條に附記すべし。

(一)つ　の語原は果つの略なりといへど定ならず、諸動詞の連用法に連りて、半過去の意を示せり。

我心春の山邊にあくがれて長々し日を今日も暮しつ

深山出て夜半にや來つる時鳥曉かけて聲の聞ゆる

(二)ぬ　は往ぬといふ動詞より出でたるものにして、萬葉には往の字を當てたり、奈變の死ぬ、往ぬのみに限りて、連ることなきも亦これによるか。

此助動詞も亦諸動詞の連用言に連りて、半過去の意を表はすことつに同じ。

梓弓おして春雨けふ降りぬ明日さへ降らば若菜つみてん

(三)たり　は此次なるせり、けりと同じく、皆あり(有)の複合せるものにして、たりは卽ち(つの連用法)ありの略なり、諸動詞の連用法に連りて、半過去の意を示めす。

ふる里は春めきにけりみよし野のみかきが原を霞こめたり

(四)名詞のみを受け、殆んど獨立動詞の如く用ひられて、半過去の意を示めすせりといふ助動詞あり、これはす(爲)の連用法しとあり(有)との複合よりなれるものにして、例へば

秋ふかみ青葉の山も紅葉せり名をば時雨も染めじと思ふに

此せりと同樣に、四段活用の連用法と、あり(有)と複合して、半過去をなすことあり、例へば行きとありと結びて行けりとなるが如し。

行（ユ）　けら　けり　けり　ける　けれ
打（オ）　せら　せり　せり　せる　せれ
讀（ヨ）　めら　めり　めり　める　めれ

此半過去、今は四段活用に限りて、他の活用には及ばず、生（イ）けり・落（オ）てり・任（マカ）せりなど用ふるは皆非なり。

されど、助動詞中にせり（爲（シ）あり）・めり（見（ミ）あり）・けり（來（キ）あり）などあるを思へば、もとは他の活用にも通じて行はれたるものか。

（五）けり　は過去の意を表はす助動詞にして、諸活用の連用法に連る、來（キ）とあり（有）との複合せるものなるべし、萬葉には來有の字を當てたり。

此とのはらべも富みけりさき草のみつばよつばに殿造せり

（六）き　も亦過去の助動詞にして、連用法に連なる、但し加變・佐變には不定法に連ることもあり。

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよきて秋風の吹く

此助動詞も、亦き、し、しかと、加行・佐行の兩音を交へたれば、二種の動詞集りてなれるものなるべし、即ちきはけり（來（キ）有（アリ））と同じく、く（來）より來り、し、しかはせり（爲（シ）有（アリ））と同じくす（爲）より出でたるものと覺ゆ。

忘草種取らましを會ふことのいとかく難きものと知りせば

佐夜深く寐ざめざりせば郭公人傳にこそ聞くべかりけれ

などのせにも過去の意あれば、もとはしと同活用に屬せしものならんか、要するにき、し、しかは來（ク）・爲（ス）の二動詞より轉じて、過去の助動詞となりしにわらずやと疑はる。

き、し、しかは連用に連るものなれば、四段言に於て押し、暮し、と用ひ、下二段に於ては任せき、任せし、と用ふべきを、誤りて、押せし、暮せし、任し

き任じゝなど用ふることあり、見じ、暮しゝなどは連體法なるを、誤りて終止法と考ふることあり、注意すべし。

第七節　未來助動詞

未來の助動詞に左の二種あり

	終止法	連體法	已然法
行カ	む	む	め
押オシ	けむ	けむ	けめ

此等の二助動詞中のむ、めは、次なる推量のけむ、らむ、めり、まし、又打消のまじ等のま、む、めと同じく、動詞みる(見)より出でゝ、未來の意をなせるものと思はる。

(一)むは諸動詞の不定法に連なる、押さむ・任せむ・見む等の如し、これ從來不定法を名けて將然言といふ所以なり。

鏡山いざ立よりて見て行かむ年經ぬる身は老やしぬると
吉野川よしや人こそつらからめ早くいひてし言は忘れじ

(二)けむは過去助動詞きと、未來のむとの複合したるものにして、過去に溯りて動作の未來をいふに用ふ、諸動詞の連用法に連る。

われ果てゝ風もさはらぬ苔の庵に我はなくとも露はもりけむ

上記の半過去のて、に、たりと過去のけり、きと結びて、てき、にき、たりき、てけり、にけり、たりけりとなりて大過去を作る。

過去未來

大過去

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼み初めてき
わびつゝも昨日ばかりは過してき今日や我身の限なるらん

未來助動詞

郭公峯の雲にやまじりにし有とは聞けど見るよしもなき

又半過去のて、な、たら、未來のむと連りて、半過去未來を作る。

ありとても幾世かは經る韓國の虎ふす野邊に身をも投げてむ

形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

又過去のて、に、たり、過去未來のけむに重りて、大過去未來を作る。

夏山に戀しき人や入にけむ聲ふり立てゝ鳴くほとゝぎす

第八節　推量助動詞

推量の助動詞に左の四種あり。

	中止法	終止法	連體法	已然法
押す	らむ	らむ	らむ	らめ
行く	めり	めり	める	めれ
讀む	まし	まし	ましか	
見る	らし	らし	らし	

此等の諸助動詞のむ、め、まは見より出て、ら、りは有よりしは爲より出でたること殆ど疑なし。

(一)らむ　は諸動詞の終止法(良變のみは連體)に連りて、未來を推量する意をなす。

春霞何かくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

(二)めり　は其接續法全くらむと同じ、唯其意義の上に於て多少輕重の差あり、らむは「有らむ」の約にして、單純に未來の推量なるを、めりは「見えあり」の約なれば、然りと定めて推量する意あり、されば前者は疑を挾みて意輕く、後者

は疑少くして意重し。

立田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなん

(三)まし　諸動詞の不定法に連りて、未來を推量する意を表はす。

今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消ずはありとも花と見ましや

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

(四)らし　諸動詞の終止法(良變のみは連體法)に連りて、現在及び過去の推量を表はす。

みよし野の山の白雪つもるらしふるさと寒く成まさるなり

さよ中と夜は更けぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ

第九節　詠歎助動詞

指示の助動詞より轉じて詠嘆を表はす助動詞なりあり、前者は連體法を受け、後者は終止法を受くるの差異はあれど、兩者等しくにとあり(有)との約より出づ。

指定の場合に連體法を受くるは、其下に名詞を含めたるものにして、例ば「女もして見むとてするなり」はする(モノ)なりなど、中に名詞を含めて考ふべし、其意義も亦隨て具體的なり、詠嘆はこれに反し、動詞の終止法其物を名詞と見做したるなれば、其意義は抽象的にして、餘情を添へ詠嘆の意をなす「人まつ蟲の聲するなり」と「人まつ蟲の聲する(秋の野)なり」とを比較して知るべし。

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

我庵は都のたつみ云かぞすむ世を宇治山と人はいふなり

比況助動詞

第十節　比況助動詞

相比較する意を表はす助動詞にごとしあり、諸活用の連體法、若くは互爾波の、がを受く。

此助動詞は且(讀み且書く)、がてら(花見がてら)、ごと(年ごとに)と同一語根に屬する語にして同じ等しなどの意ある語より出でたるものと思はる。

連體法を受けたるは、其下に名詞を含めたるものにして、「流るゝ如し」は「流るゝ(モノ)如し」の意なり。

第七章　副詞

副詞は動詞・形容詞又は他の副詞に副ひて、其意義を修飾する語にして、時を表はすもの(今・昔・速く・遲くの如く)、所を表はすもの(遙に・傍に・内に・外にの類)、程度を表はすもの(大に・全くの類)、狀態を示すもの(白く・赤くの類)、數を示すもの(一度・再びの類)等の數種あり。

副詞の種類

副詞の構造に左の數種あり。

(一)單獨にて副詞となるもの、此種類は大抵名詞より轉じたるものにして、例へば今(居?間)・こゝ(此處)・上(う邊)・古(往し邊)の如し、且は此事をしながら、彼事をもする意にして、接尾語がてらと共に、助動詞ごとしの語根に近き形なり。

(二)互爾波に、と、ての結びてなれるもの。

には名詞若しくは動詞の連用言に結びて副詞となる、例へば、前に・後に・常に・第一に・偏(一方)に・大に・更(新、白)にの如く、

又盛に(四段言盛る)、頻に(四段言きる)、互に(四段言違ふ)、亂りに(四段言亂る)の如し、アストン氏は此且爾波にを以て、嘗て存在したる動詞の活用中の一形なりとせり、今その諸動詞連用法に結びて副詞となるを見るに、此說も亦聊據る所あるに似たり。

又思ふに、案ずるに、欲い儘に(恣に)の如く、句をなせるものもあり。

とは諸種の語に結び付きて副詞となる、長々と、遙々との如し。

ては動詞に結び付きて、副詞句を造る果して、極めて、始めて、辛じて、謹みての如し。

(三)動詞の連用言は副詞の用をなすことあり、引き裂く、立ち上るの如し、又たとひ(假令)の如く、動詞たとふ(譬)より出でゝ、全く副詞となれるもあり。

(四)疊語よりなるもの。度々・抑・遙々のごとし、凡て動詞の疊語は必らず副詞となる染々・取々・絶々・增々・有々・知らずくの類なり。

(五)く形の副詞。此種の副詞の多數は形容詞の副詞法に屬す、卽ち善く・惡しく・遠く・近くの類なり、然れども、既に前章動詞の條に述べたるが如く、此副詞形くはもと活用言全部に通じたるものなるが故に、其遺片今尙諸種の形をなして存在す。

(1) haru (晴) 動詞
haru-ka (遙) 副詞
haru-ka-su (晴) 動詞

(2) sit?
- k 副詞形
  - sidsu-ka (静) 副詞
  - sidsu-ku (沈) 動詞　そづく白玉」そづく花の色」など
  - sidsuku (滴) 名詞
- m 名詞形
  - sidsu-nu (沈) 動詞
  - sidsu-maru (鎮) 動詞
  - sidsu-mu (鎮) 動詞

(3)
- siro 白 形容詞
- siro-ku (白) 副詞
- sira-gu (白) 動詞

(4)
- mane-si (普) 形容詞
- mane-ku (普) 副詞　眞根久往者人應知（マネクユカバヒトシリヌベシ）
- mane-mi (普) 名詞　不見日佐麻禰美（ミヌヒサマネミ）
- mina (皆) 副詞
- a-mane-ku (普) 副詞

(5)
- sayu (冴) 動詞
- saya-ka (鮮) 副詞

(6)
- ko (此) 代名詞
- ka-ku (斯) 副詞

禁示の意を表はす副詞になり、此副詞は諸動詞終止法（良變のみは連體法）の後を受け、又は連用法の前に立ち（加變佐變のみは不定法）、其後をそにて受く、例ば行くな」有る「な」な行きそ」な來そ」な爲そ」の如し。

予思ふに、此なはもと否定を表はす獨立の動詞にして、卽ち豈否（アニイナ）無何（ナシナニ）等と共に、奈行の活用をなせしものなるべし。

- nu (勿) 禁止副詞
- i-nu (否) 紀に不須（イナ）の字を當つ動詞いなむ、いなぶるもあり
- na-si (無) 形容詞

a-ni　(豈)　價なき寶といふとも一坏の濁れる酒に豈まさらめや

na-ni　(何)　副詞、花にあかで何歸へるらん

ni　(助動詞)　鶴寸乎白土(不知)・阿可爾(不飽)

nu　(打消助動詞)

ne　(打消助動詞)

故に此副詞は動詞の下に來るを本體とすべし、動詞の上に立つことあるは、恰かも疑問のや、か等が動詞の前に來りて掛となると同じく、語勢を強むるためより出でたるものなるべし、(尙詳しくは後節掛結の條に說くを見よ)されば古くは下に來るそなきも多し。

他辭乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背

第八章　接續詞

接續詞は二箇の文又は句の中間に立ちて、上下を連接するものにして、又・且・及び・幷にの類なり。

接續詞は大抵他の品詞より轉來せるものにして、性來のものとてはあらず、例ば、又(名詞股?)、且(如、兼、毎と同じくもとは動詞)、抑(其も々々)、或(有謂ハ)、偖(然而)、而(あかくして)、卽(直路?)若(もしくと轉ずるを見れば形容詞か)の如く、何れも他の品詞より出でたるものゝ如し、

第九章　豆爾乎波

豆爾乎波の名は人の知るが如く、漢文の訓讀を助くるため、漢字の四側に點を付し、これに一定の讀み方を與へたるものゝ中、其四隅にテ・ニ・ヲ・ハの四字ありしに基く、故に

「が」「の」（主格）「い」

豆爾波の多數は漢字に表はし難く、獨立の意義なき助辭にして、他の語の下に付きてこれに諸種の意義を添ふるものなれば、一に後置詞ともいふ。

凡て豆爾波を左の三種に分つ。

(一)名詞の下にのみ付くもの
(二)種々の語の下に付くもの
(三)動詞の下にのみ付くもの

第一節　名詞の下に付く豆爾波

(一)「が」「の」は動作狀態の主體たる名詞を擧げて示めす豆爾波なり、「鳥が鳴く」「風の吹く」の如し。

(二)「い」は前條の「が」「の」と同意にして、用方古し、「木乃關守伊」「家有妹伊」「伴健岑伊」の如し、又

事淸甚毛莫言一日太爾君伊之哭者痛寸取物

此「い」は動詞の下にも附きて捨つるい「此を持つい」など用ひられれど、其間に「人」「者」等の名詞省かれたるが如く、必らず其動作をなす人を擧げ示す意あれば、暫く第一類の中に擧ぐ。

「が」「の」（領格）

(三)「が」「の」は名詞と名詞との間に立ちて、所屬の意を示す、其轉じて諸種の關係を示めすものに、左の數種あり。

所有の意あるもの、　君が世、我が身、人の子
下なる名詞を限定するもの、　梅の花、天が下、世の樣
「にあるの」の意のもの、　近江の琵琶湖、駿河の富士
「の如きの」の意のもの、　花の顏、露の命

(四)つ　前條所屬の意を示すのに似て、其用法古く、且制限ありて、一般に通じて用ひ難し、天つ風・中つ國・沖つ浪・毛つ物(獸)・面つ邊(表)・庭つ鳥(鷄)・家つ子(奴)の類なり。

(五)に　動作の底止する地位を表す、例へば「友に與ふ」「山に登る」「家に住む」等の如し、又それより轉じて「道に說く」の如く、にての意をなすものもあり、「犬に嚙まる」の如く、の爲にの意を示し、「死に優るの」如く、比較の意を表すもあり。

(六)を　他動詞の目的たる名詞を示す、「書を讀む」「花を見る」の如し、又自動詞に係りては、動詞の行はるゝ地位を示す、「道を行く」「橋を渡る」の如し。

(1)乙女に逢ふ　に通ふをあり、又に通ふのあり。

(2)乙女の逢ふ　加本余伎表登賣能阿幣流
志賀の山越に女の多く逢へりける

(3)乙女を逢ふ　志賀の山にて女を逢へりける

以上の三種、ともに其意通ひて、亦少しく異るところあり、には動作の底止する所を示し、をは動作の波及する目的物を示す、彼は靜止的にして、これは活動的なり、「乙女に逢ふ」は道を行きて、乙女の來るに逢へるにて、唯偶然行き逢ふの意なれども、「乙女を逢ふ」といへば、乙女の來るを見、此方より故らに其方に進み行きて逢ふといふ程の意あるべし、さて「乙女の逢ふ」といふは、彼方を主としていへる語なれば、其差異も亦判然たり。

(七)へ　は方向を示す、されば前(目邊)・後(尻邊)・古(往邊)・夕(夕邊)・

表(面邊)等の熟語をもなせるなり、例ば「都へ上る」「東へ行く」の如し、されば地位を示すにとは區別して用ふべく、「僧正遍照が許に奈良へ罷りける時」「筑紫へ行くとて明石の浦にて」などの例を見て知るべし。

「前に進む」「山へ登る」など、用ひたるは、正しといふべからず、但にはへに通はして用ひたるもあり。東ヲ西ニ行ルガ如シ

(八)より　から　何れも動作の起點を示す。「東より西に行く」「今日から明日まで」の如し、よりはまた轉じて、比較の標準をも示す。「山より高く海より深し」の如し。

古くはよりをよとも、亦ゆともいへり。

田子の浦ゆ打出て見れば。　繁き木間よ起つ鳥の。

あが松原よ見渡せば。　雁がねの聞ゆる空ゆ月立ち渡る。

又からの語義を考ふるに、かには處の義あり、都(宮處)・其處・隱處・陸(國處)・海處・丘(峽處)等にてこれを知るべし、而して自から・自から・手づから等のかも、亦處の義と解すべく、身の處・己の處・手の處なるべし、さらば其等の語尾に添へるらは如何に見るべきか、余は前に述べたるよりのよが獨立の意義を備へたに用ひらるゝこと、及びからのかに獨立の意義を備へたる事等より推測してよりからのり、らはもと獨立したる一箇の豆爾波にして、にて、を以て等の意を備へたるものなるべしと考ふ、浮海(フネヨリシテ)、泛海往(ウカラユキ)(書紀)人都末乃馬從行爾己(ツマノマヨリユニス)夫之歩從行者(カテコナバ)(萬葉)等のよりには尚此古義を存したり。

このら、りと同種の豆爾波なりと思はるゝもの他に多し、